

福井県埋蔵文化財調査報告 第134集

福井城跡

— J R 北陸線外 2 線連続立体交差事業(豊島地下道延長工事)に伴う調査—

2 0 1 3

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

福井城は、徳川家康の次男結城秀康が、越前統治の本拠として慶長6年（1601）から6年あまりの歳月をかけて造営した、典型的な輪郭式平城です。現在の福井市街は、その城下町を基礎に発展してきましたが、その過程で市街地整備や福井空襲、福井震災などの災害、さらにそれからの復興事業などにより、城下町の面影はすっかり失われてしまいました。現在では、本丸跡の石垣と内堀だけが、往時の姿を留めています。しかし、近年になり、市街地で地下駐車場整備事業・市街地再開発事業等が進められ、それに伴う調査により、かつての福井城の様相が少しずつ明らかになってきました。この度、J R 北陸線外2線の鉄道路線の連続立体交差事業の着手が認可され、遺跡の破壊の恐れのある地区について、発掘調査を行いました。そのうち、豊島地下道延長工事に伴う調査について、その後の遺物整理事業も終了し、ここにその成果を報告できる運びとなりました。

調査では、福井城跡では初めて、町屋に関わる石列・溝・ゴミ穴等の遺構群を確認しました。また、多数の陶磁器、石臼や行火などの石製品、煙管や匙などの金属製品、また取瓶など鑄造関連製品など、当時の町屋の生活を窺い得る遺物が出土しました。今後、これらの資料が、福井城の歴史を知る手掛かりとなるとともに、本書が、学術研究・郷土史研究・学校教育など各方面で広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を頂きましたことに、深く感謝申し上げます。

平成25年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 佐 藤 圭

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターがJ R北陸線外2線連続立体交差事業(豊島地下道延長工事)に伴い、平成10・11年度に実施した福井城跡(福井県福井市手寄1丁目所在)の発掘調査報告書である。
- 2 福井城跡の調査は、福井県駅周辺整備事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、河村健史が担当した。
- 3 発掘調査は、平成11年1月4日から1月22日および7月15日から8月8日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成12年4月1日から平成24年3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は中原義史があたり、中原、御嶽貞義、木村茉莉が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下のとおりである。
中原 第1～3章、第5章 御嶽 第4章第3・4節 木村 第4章第1・2節
- 5 福井城跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 遺構の図版作成は中原が行った。遺物の図版作成については、土器・陶磁器は木村が、金属・石製品は御嶽が行った。土器・陶磁器の製図・写真撮影については、株式会社総合文化企画に委託した。金属・石製品の写真撮影は御嶽が行った。
- 7 本書に掲載した遺構図は、調査員が作成したものと、株式会社パスコに委託して作成したものを合成して使用した。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符号する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高(m)を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は、国土方眼座標第VI系に基づく。
- 10 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 発掘調査には地元の方々の参加・協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員がたった。
- 12 福井城跡の調査区番号は、遺跡の略号FKJと、調査年次およびその年の福井城跡関連調査順番号からなる。今回の調査区番号は、南側調査区がFKJ98-9、北側調査区がFKJ99-2である。
- 13 本遺跡の所在地は、中世から柴田勝家の時代、さらに結城秀康入国後の17世紀初めまで、「北庄」と呼ばれていた。その後、寛永元年(1624)に「福居庄」「福井庄」へと改称され、さらに元禄年間(1688～1704)から「福井」が広く使われるようになっていった。しかし、このような変遷を記述に反映させると煩雑になるため、本書では柴田勝家築城の城を北庄城、結城秀康築城の城を福井城と表記し、遺跡名としては北庄城の時期を含めて福井城跡と総称する。また、慶長6年(1601)の結城秀康の越前入国・福井城の築城開始を以て近世の始まりとする。
- 14 断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編 新版『標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に拠る。
- 15 第2図は福井市共用空間データを同市の承認を得て使用した。
- 16 第3・26図は「福居御城下絵図」1320(松平文庫蔵・福井県立図書館保管)と、周辺地域の工事立会調査の成果を基に作成した。

目 次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 遺 構	
第1節 FKJ98-2の遺構	4
第2節 FKJ99-2の遺構	4
第4章 遺 物	
第1節 陶磁器・瓦	14
第2節 土師質土器皿	22
第3節 金属製品	25
第4節 石製品	27
第5章 まとめ	31

写 真 図 版 目 次

図版第1 遺構 FKJ98-9	図版第4 遺構 FKJ99-2
(1) 調査区東半部道路面(東より)	(1) 遺構74・113(西より)
(2) 調査区東半部道路面(西より)	(2) 遺構113(北西より)
(3) 道路土層断面(西より)	(3) 遺構74(西より)
(4) 調査区東端部道路造成面(西より)	(4) 遺構74上面土師質土器皿 出土状況(東より)
図版第2 遺構 FKJ99-2	(5) 遺構74・116(北より)
(1) 1面全景(東より)	(6) 遺構74・116(北より)
(2) 遺構54・101・102(西より)	
(3) 遺構54・101(南より)	図版第5 遺物 土器・陶磁器
(4) 遺構53・104(南より)	図版第6 遺物 土器・陶磁器
(5) 遺構105・106(南より)	図版第7 遺物 土器・陶磁器
(6) 遺構114(北より)	図版第8 遺物 土器・陶磁器
(7) 遺構114(東より)	図版第9 遺物 土器・陶磁器
図版第3 遺構 FKJ99-2	図版第10 遺物 土器・陶磁器
(1) 3面全景(東より)	図版第11 遺物 石製品
(2) 遺構101・110(南西より)	図版第12 遺物 石・金属製品、鑄造関連遺物
(3) 遺構115(東より)	(1) 石製品
(4) 遺構115(南より)	(2) 金属製品
(5) 遺構113(南より)	(3) 鑄造関連遺物
(6) 遺構113(西より)	

挿 図 目 次

第1図	調査地の位置	2	第15図	土器・陶磁器実測図2	17
第2図	調査区の位置とグリッド	2	第16図	土器・陶磁器実測図3	18
第3図	福井城構造図	3	第17図	土器・陶磁器実測図4	19
第4図	FKJ98-9遺構配置図	6	第18図	土器・陶磁器実測図5	20
第5図	FKJ98-9土層断面図1	6	第19図	土器・陶磁器実測図6	21
第6図	FKJ98-9土層断面図2	7	第20図	土器・陶磁器実測図7	22
第7図	FKJ99-2遺構配置図1	8	第21図	金属製品実測図	26
第8図	FKJ99-2遺構配置図2	9	第22図	鋳造関連遺物実測図	26
第9図	FKJ99-2遺構配置図3	10	第23図	銭貨拓影	27
第10図	遺構113・114・115平・立面図	11	第24図	石製品実測図1	28
第11図	FKJ99-2土層断面ポイント図	12	第25図	石製品実測図2	30
第12図	FKJ99-2土層断面図1	12	第26図	調査区周辺の町割り図	32
第13図	FKJ99-2土層断面図2	13	第27図	調査区の南北土層模式図	32
第14図	土器・陶磁器実測図1	16	第28図	福井城周辺の旧地形図	32

表 目 次

第1表	遺構観察表	5	第4表	鋳造関連遺物観察表	25
第2表	土器・陶磁器・瓦観察表	23	第5表	銭貨観察表	27
第3表	金属製品観察表	25	第6表	石製品観察表	29

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

今回の調査は、福井駅付近のJ R北陸線外2線連続立体交差事業に伴い実施したものである。この事業は、福井駅周辺の鉄道による交通渋滞や市街地の分断状況を解消し、東西市街地の一体的な整備を目指して構想されたもので、平成4年に国の事業認可がなされた。工事予定地は、福井市みのり1丁目から開発町にかけての総延長約3.3kmに及び、そのうち福井駅周辺の約1.4 kmの範囲が、周知の遺跡である福井城跡内を縦断する予定であった。このため、事業主体である福井県土木部都市計画課および福井県駅周辺整備事務所と協議を重ね、高架側道4号線・同5号線・J R福井駅部の3工区の施工予定に合わせ、それぞれ調査に着手することになった。

最初に、高架側道4号線の試掘調査・本調査が平成8年から10年までの3カ年にわたって行われた。次に平成10年11月から5号線の調査が開始されたが、その期間中に駅部工事のため北陸線の仮線の設置に伴い、福井市手寄1丁目にある豊島地下道の延長工事が行われることとなった。試掘調査により、近世の遺構・整地層を確認し、その結果を基に福井駅周辺整備事務所と協議を行い、工事予定範囲全体で本調査を実施することとなった。

調査地点は、県道5号福井加賀線(通称:城の橋通り)とJ R北陸線が交差する地点に設けられた南北2基の地下道の出入口付近にあたる(第1・2図)。工事の進行状況に合わせ、先に南側、次に北側の調査区の調査を実施することとなった。南側調査区の面積は103㎡、調査区番号はF K J 98-9、北側調査区の面積は83㎡、調査番号はF K J 99-2である。

第2節 調査の経過

F K J 98-9調査区の調査は平成11年1月4日に開始し、同年1月22日に終了した。また、F K J 99-2調査区の調査は平成11年7月15日に開始し、同年8月8日に終了した。以下に各調査経過の概要を記す。

F K J 98-9調査区

平成11年1月5日/現地作業開始。攪乱掘削。トレンチ掘削。19日/掘削終了。断面図作成。21日/作業終了。

F K J 99-2調査区

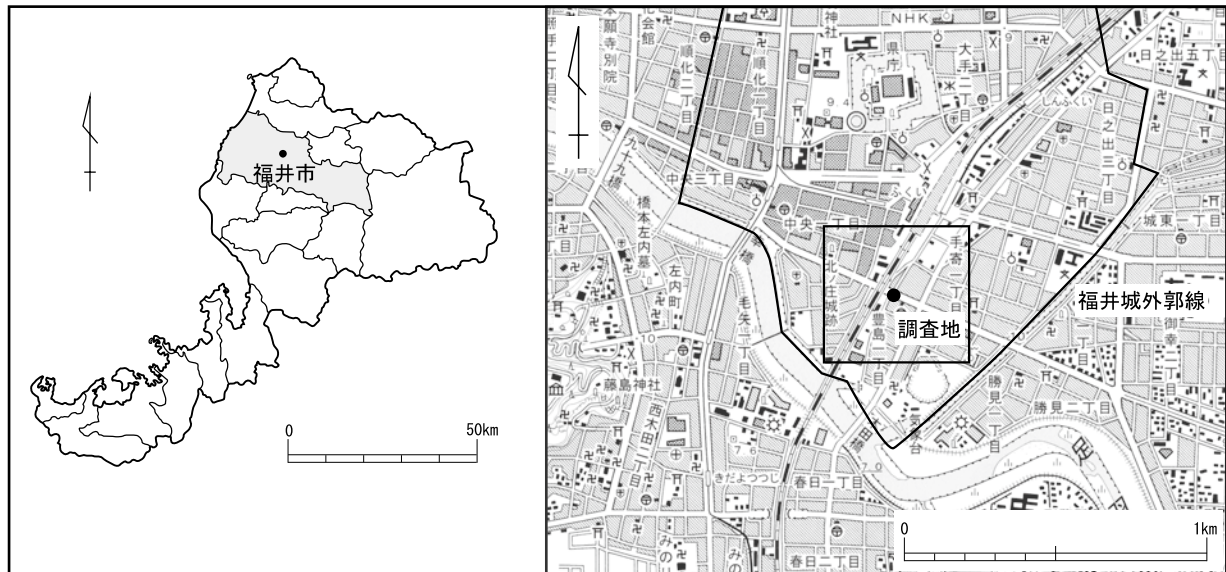
平成11年7月15日/現地作業開始。表土掘削。16日/第1面平板測量。トレンチ1断面図作成。19日/上層掘削。

21日/写真撮影。トレンチ2断面図作成。22日/焼土層掘削。27日/中層掘削。東西断面図作成。

28日/第2面平板測量。

8月3日/遺構掘削。第3面平板測量。6日/第4面平板測量。7日/第5面平板測量。写真測量。

8日/最下層掘削・平板測量。作業終了。



第1図 調査地の位置（縮尺 $1/2,000,000 \cdot 1/25,000$ ）



第2図 調査区の位置とグリッド（縮尺 $1/3,000$ ）

第2章 遺跡の位置と環境

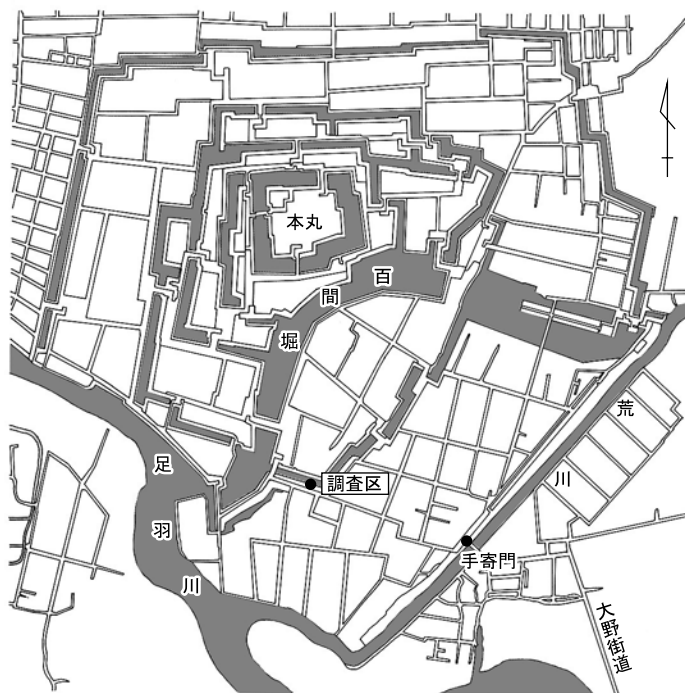
近世の福井城は、慶長6年(1601)に、家康の次男である結城秀康が68万石の領地をたまり、築城を開始したことに始まる。この地は、九頭竜川の支流足羽川と北陸道が交わる交通の要衝であり、一乗谷に本拠を置いた戦国大名朝倉氏も、城館を設けて一族を配していた。その後、朝倉氏を滅ぼした織田信長によって、越前の支配をまかせられた柴田勝家は、この地に越前では最初の近世城郭である北庄城を築き、以後、越前支配の拠点の北庄に移ることになった。

結城秀康は、福井城の築城にあたり、新たに縄張りを行ったと言われている。しかし、福井城の地割には北庄城期のものを踏襲していると考えられる地点もあり、必ずしも北庄城期の構造が残されていないわけではない。築城工事は、慶長11年ころ一応の完成を見たと言われるが、城下絵図の記載や発掘調査成果等から、その後も17世紀後半まで、堀や門の増設・新設などが続けられたようである。

この城下の構造に大きな変化をもたらした出来事として、寛文9年(1669)の大火(寛文大火)があげられる。これにより、本丸、天守をはじめ、武家屋敷379軒や町屋2676軒あまりが焼失した。その復興に際し、屋敷割りの変更のほか、盛土や溝の改修、火除地の設置など、大規模な工事が行われたことが、これまでの発掘調査からわかってきた。また、貞享3年(1686)には、当時の藩主に武家諸法度に触れる行いがあったとの理由で、知行高が25万石まで削減される処分を受けた(貞享の大法)。これに伴い藩士2,000人あまりに暇が出され、武家屋敷地に多くの空き地が見られるようになった。明治維新後、福井城は外郭部から門・堀の取り壊しや堀の埋め立てが進められ、現在では本丸とそれを取り巻く内堀が残るだけとなっている。

今回の調査区は、本丸の東南方向の堀と足羽川・荒川に囲まれた曲輪の中に位置する(第3図)。この曲輪の中央を、城郭中心部と手寄門を結ぶ道路が東西に走っている。門の先には大野街道がつながっていることから、城下でも主要な道路であったと思われる。この道路の西端部は城ノ橋上町・下町という町屋地で、道の両側に町屋が立ち並んでいた。今回の調査地点は、城ノ橋下町にあたり、F K J 98-9は道路中央部、F K J 99-2は道路北側の町屋に位置すると想定される(第26図)。また、FKJ99-2のすぐ北には石垣と堀があることが絵図の記載から想定されていたが、その位置は後日実施された周辺部の工事立会調査によって確認された。

なお、曲輪の南西部を流れる荒川は、もともと「百間堀」の位置を流れていたが(吉野川)、築城に際して現在の位置へ付け替えられたものである。地質調査などによると、その分流が調査区付近の堀の位置を流れていたことが想定され、旧河川を利用して堀が築造されたことをうかがわせる(第28図)。



第3図 福井城構造図 (縮尺約 1/20,000)

第3章 遺構

第1節 FKJ98-9の遺構

城下絵図との対応から、調査区全体が道路にあたると考えられたが、近代以降の攪乱や削平が多く、道路面が確認できたのは一部だけである(第4図)。道路は、砂を多く含む土を敷いたのち、直径1～2cm程度の砂利を含む土を敷き、堅く突き固めて造られている(第5・6図)。最も残りの良い部分で、道路面は3面確認できた。1面目は標高7m付近、2面目は6.9m付近、3面目は6.8メートル付近にあたる。3面目が福井城築城時のものと考えられるが、他の面については築造時期が確定できなかった。その下には、整地土層が1m以上続き、5.4～5.5m付近に地山がある。調査区内では、北庄城の時期にさかのぼる遺構・遺物は確認できず、これらの整地土層は近世初頭の福井城築城にともなうものと考えられる。調査区東端部では、道路造成土直下の面に激しい凹凸が見られたが、それが生じた原因や目的などは不明である(第5図-2)。また、この付近では地震に伴う噴砂や地層のずれを確認した(第5図-1・第6図-1)。多くは、昭和23年(1948)の福井地震の際のものと考えられる。

第2節 FKJ99-2の遺構

近代以降の攪乱・削平が多く、遺構の残りは良くなかった。整地土層は大きく上層・焼土層・中層・下層・最下層の5つに分けられる(第12・13図)。出土遺物から、最下層は17世紀初頭、中・下層は17世紀前葉から中葉にかけて、焼土層は寛文9年(1669)の大火直後、上層は17世紀後半から18世紀後半にかけてのものと考えられる。遺構面は、上層で2面(第1・2面)、中層で1面(第3面)、下層で2面(第4面・5面)の5面が確認できた(第7～9図)。地山は南から北に向かって下がっており、南側では標高5.5m付近であるが、北側では4.5m以下まで落ちている(第12図-1)。

確認された主な遺構には、石列・集石・溝・土坑等がある。絵図との対応から、調査区付近は近世を通して町屋地であったと考えられ、これらの遺構も町屋関連のものと思われる。

石列・集石(第7～10図) 石列・集石が18基確認された。石列の多くは近世の道路の方向に並行あるいは直交する向きに作られている。多くは建物の基礎石と考えられるが、すべて断片的で建物の平面形や規模を復元できるものはなかった。

主な石列についてのみ解説を加えると、石列101は残存部長1.85mで、上面の標高は7.2m付近、標高6.6m付近から平面長方形の板石を積んで造られている(第7図-1面)。石列104は残存部長1.25mで、上面の標高は7.1m付近、平面長方形の板石一枚と、多数の角礫で構成されている(第7図-1面)。石列105は残存部長1.30mで、上面の標高は7.1m付近、平面方形に近い石を並べて造られている(第7図-1面)。石列113は残存部長2.20m、東西方向に連なるが、1m間隔で3ヵ所、南北方向に平面長方形の石を積んだ部分を持つ(第10図)。上面の標高は6.8m付近、石は標高6.0m付近から積まれている。石列114は残存部長1.25m、上面の標高は7.1m付近、北側に面を持つように積まれている(第10図)。石列115は、東西方向に2.10m、南北方向に2.90mとT字状に連なる。南北に並ぶ部分の南半分は、平面長方形の石を並べている。これには、ほぞ穴を持つものもあり、別の用途から転用されたものと考えられる。上面の標高は7.0m付近、石は6.6m付近から積まれている(第10図)。

溝(第7図-1面・第13図-1) 溝は1条確認された(溝54)。石列101に接して作られており、幅0.65m、残存部長は3.20m、深さは40cm以上ある。中から木の板材が出土している。

土坑等(第7～9図) 土坑・石列掘方等は16基確認された。主なものについてのみ解説を加えると、53は越前焼の埋甕で底部付近のみ残存している(第7図-1面)。55は石列105の掘方である(第7図-1面)。57は大型の方形土坑であり、陶磁器類が多く出土している(第7図-2面)。火災を受けたものもあり、埋土に炭や焼土が多量に含まれることとあわせ、この土坑は寛文大火の被災遺物の廃棄土坑と考えられる。61は石列107の掘方である(第7図-2面)。

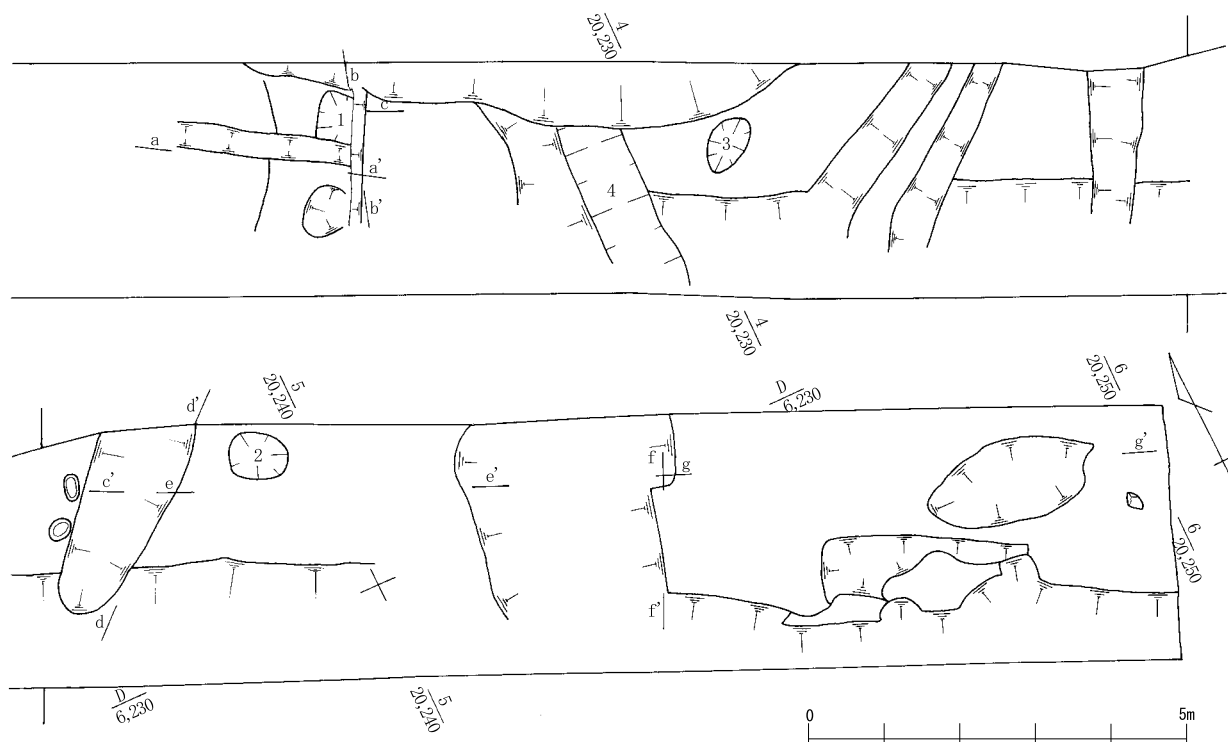
落ち込み(第9図-6面) 調査区の北側に沿うように地山が落ち込み、傾斜面となっている(落ち込み74)。この落ち込みは、17世紀前葉に木質の廃棄物を多量に含む土などで埋め立てられている(第12図-1)。調査区西端部では、落ち込みの肩から底にかけて、笏谷石礫が固まって出土している(遺構116・第9図-6面・第12図-1)。護岸として積んだようには見えず、埋め立てに際して入れられたものと考えられる。その後も寛文大火後にかけて複数回土を入れ、かさ上げを行っている(第12図-1・第13図-2)。土は北に向かってゆるやかに低くなるように入れられている。焼土層や上層では、部分的に砂利敷きが認められる(第12図-1・第13図-2)。建物基礎の地固めや土留めを目的にしたものか、あるいは敷地内の通路にあたる部分に敷いたものかとも考えられる。

調査区北方には、城下絵図によって石垣と堀があることが想定されており、後に周辺部の工事立会調査の際に石垣が検出されている。それらを総合すると、調査区の北端部のすぐ近くに石垣ラインがあると考えられる(第26図)。その場合、この落ち込みは石垣構築に際して地山を掘削して生じたものか、それとも吉野川の支流に伴う自然地形であったものか、いずれかが考えられる。しかし、現時点ではその結論にいたる情報はなく、周辺地区の調査成果の増加を待ちたい。

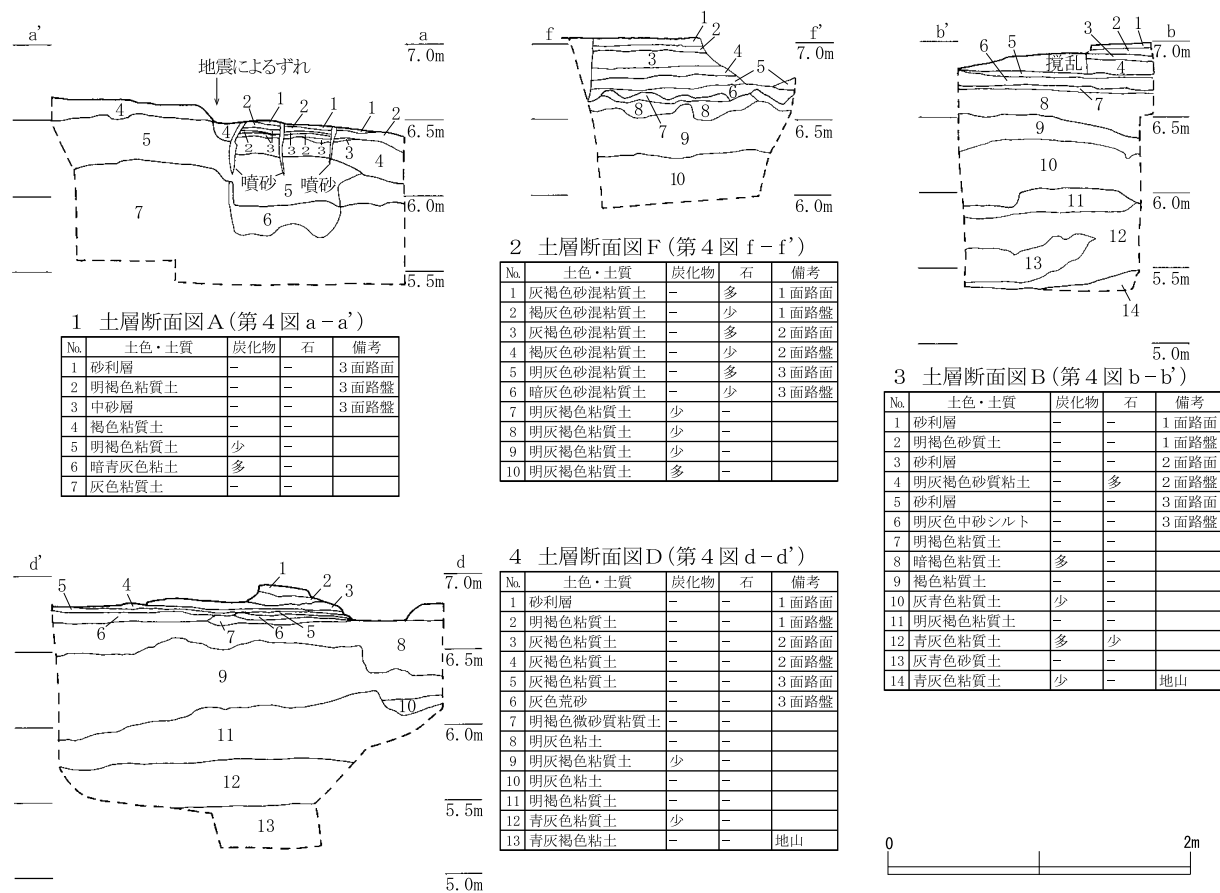
第1表 遺構観察表

遺構番号	調査区番号	帰属面	グリッド	法量(単位m)		種別	主な出土遺物の時期	備考	主な遺物
				長辺	短辺				
1	98-9	-	D-3	0.65	0.45	土坑	-		
2	98-9	-	D-4	0.80	0.60	土坑	-		
3	98-9	-	D-4	0.80	0.50	土坑	-		
4	98-9	-	D-3	2.20	0.80	溝	-		
51	99-2	1面	D-5	(0.70)	(0.55)	土坑	-		
52	99-2	1面	E-4	0.90	0.60	土坑	17c		土】皿。越】播鉢。瀬美】天目。伊】皿。
53	99-2	1面	D-5	0.50	0.35	埋甕	-		
54	99-2	1面	D～E-4	(3.20)	0.65	溝	17c前葉		土】皿。越】壺。伊】碗、皿、小杯。唐】皿。中】壺。
55	99-2	1面	D-6	(1.30)	0.50	石列掘方	17c中～後葉	石列105の掘方	土】皿。唐】碗・片口。伊】皿。
57	99-2	2面	D～E-4	(1.60)	1.50	方形土坑	17c中～後葉	埋土に炭・焼土多量に含む	土】皿。越】甕、播鉢。伊】碗、皿、香炉。唐】皿、鉢。中】碗。
59	99-2	5面	D-5	(0.70)	(0.40)	土坑	-		
60	99-2	5面	D-5	4.10	-	石列掘方	18c?	石列115等の掘方。 遺物は混入したものか?	越】播鉢。唐】皿、片口。
61	99-2	2面	E-4	1.20	(0.40)	土坑	17c中～後葉	石列107の掘方か	唐】皿、瓶。
62	99-2	3面	D-5	0.80	0.70	土坑	-		唐】碗。
65	99-2	3面	D-5	0.60	0.30	土坑	-		
69	99-2	4面	D-5	1.85	(0.80)	土坑	-		
71	99-2	5面	D-5	(0.80)	0.45	土坑	-		
72	99-2	5面	D-5	0.40	0.35	土坑	-		越】壺。
74	99-2	6面	E-4～5 D-5・6	15.60	5.00	落ち込み	17c前葉～	整地土(最下層・下層・中層・ 焼土層・上層)で埋められる。	
101	99-2	1面	E-5	1.85	0.70	石列	-	溝54の側壁か	
102	99-2	1面	E-4～5	0.90	0.50	集石	-	溝54の側壁か	
103	99-2	1面	D～E-4	1.45	0.50	集石	-		
104	99-2	1面	D-5	1.25	0.60	集石	17c後葉		越】甕。
105	99-2	1面	D-6	(1.30)	0.50	石列	-		
106	99-2	1面	D-6	(1.50)	(0.85)	集石	-		
107	99-2	2面	E-4	1.20	0.45	集石	-		
108	99-2	2面	E-4	1.10	0.30	集石	-		
109	99-2	2面	D-5	0.80	0.80	集石	-		
110	99-2	3面	E-4	2.20	0.70	集石	18c前葉		越】甕。
111	99-2	3面	E-4～5	1.70	0.85	集石	-		
112	99-2	3面	D-5	0.80	0.50	集石	17c前葉		美】碗。唐】甕。
113	99-2	3面	D-5	2.20	0.55	石列	-		
114	99-2	3面	D-5	1.25	1.10	石列	17c中葉		伊】碗。
115	99-2	3面	D-6	2.90	2.10	石列	17c中葉		越】甕。唐】向付。
116	99-2	6面	E-4	2.20	1.50	集石	-		
117	99-2	2面	D-5	1.30	0.60	集石	17c後葉		土】皿。美】小杯。伊】碗。
118	99-2	4面	E-4			集石	-		瓦】軒丸瓦。

註 主な出土遺物については以下の略号を用いる。土】土師質土器、越】越前焼、唐】唐津焼、伊】伊万里焼、瀬美】瀬戸・美濃焼、美】美濃焼、中】中国陶磁器

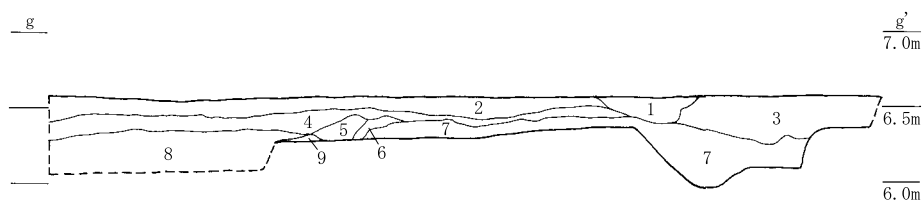
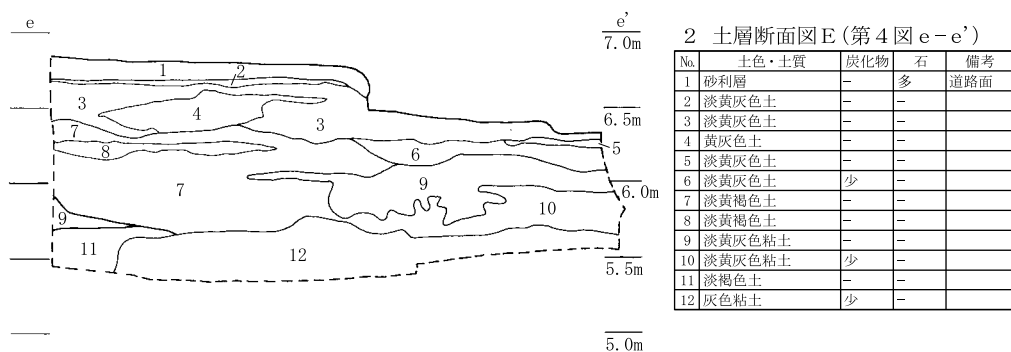
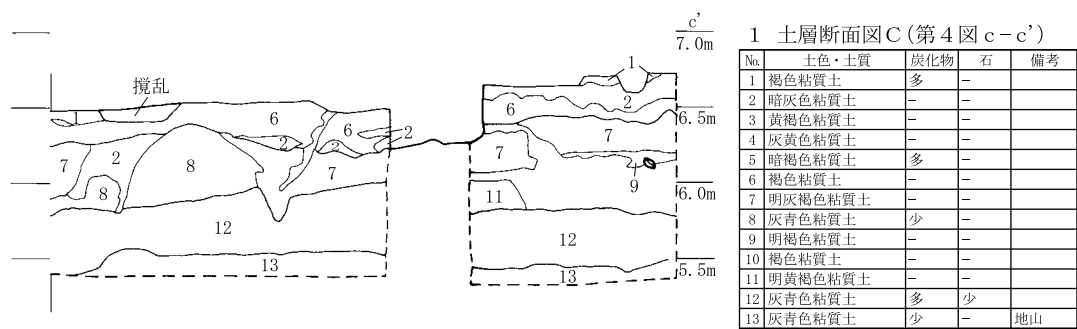
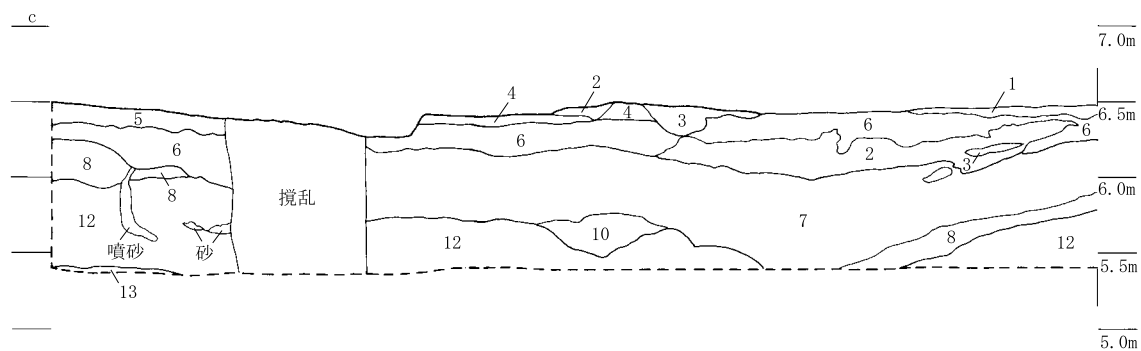


第4図 FKJ98-9 遺構配置図 (縮尺 1/100)



第5図 FKJ98-9 土層断面図1 (縮尺 1/50)

第2節 FKJ99-2の遺構

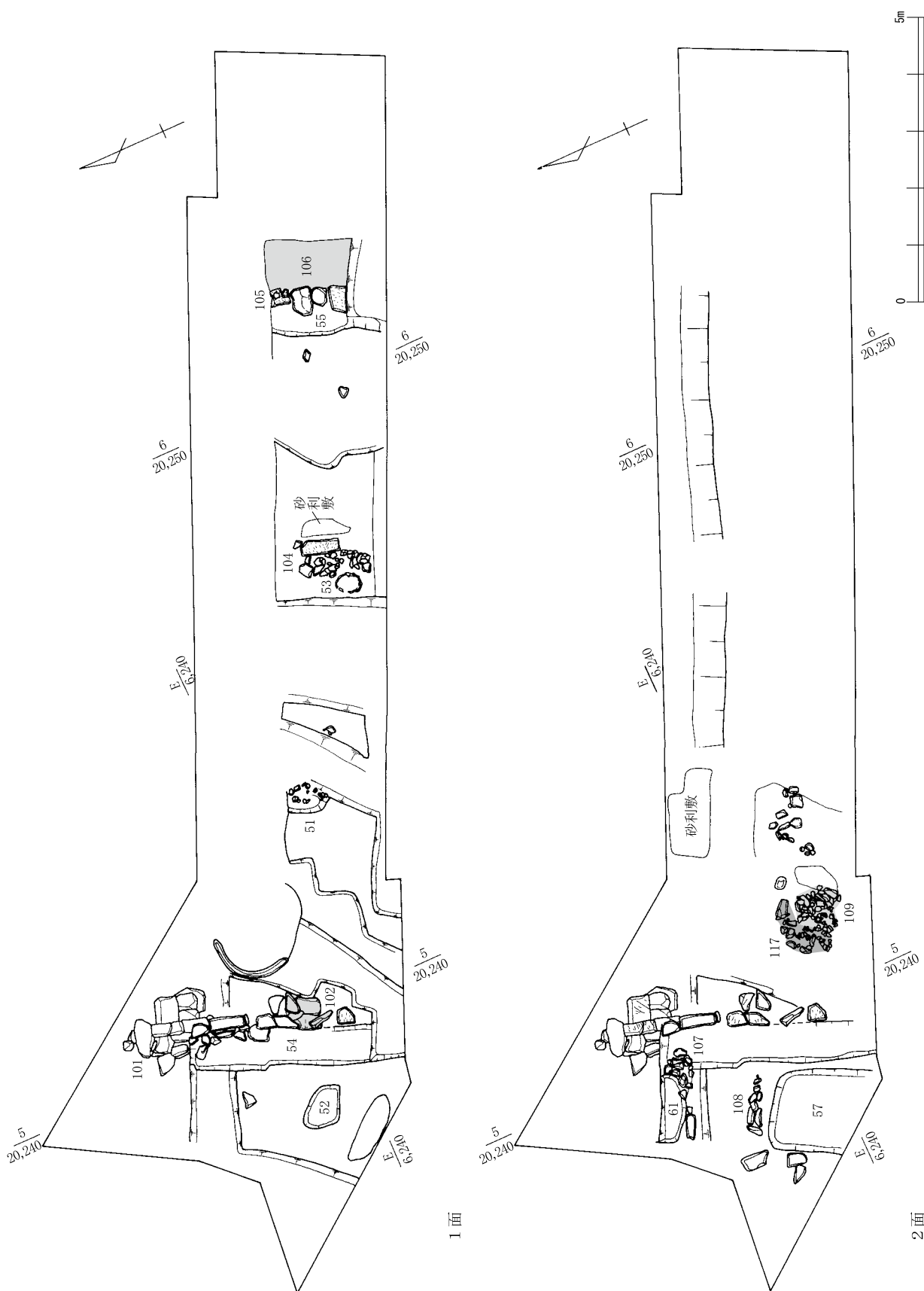


3 土層断面図G (第4図 g-g')

No.	土色・土質	炭化物	石	備考
1	荒砂層	-	-	
2	淡黄灰色砂質土	少	-	
3	淡灰色粘土	少	-	
4	灰黄褐色粘質土	-	-	
5	淡黄灰色粘土	-	-	
6	黄灰色粘土	-	-	
7	灰色粘土	多	-	
8	黄褐色粘質土	-	-	
9	黄灰色粘土	-	-	



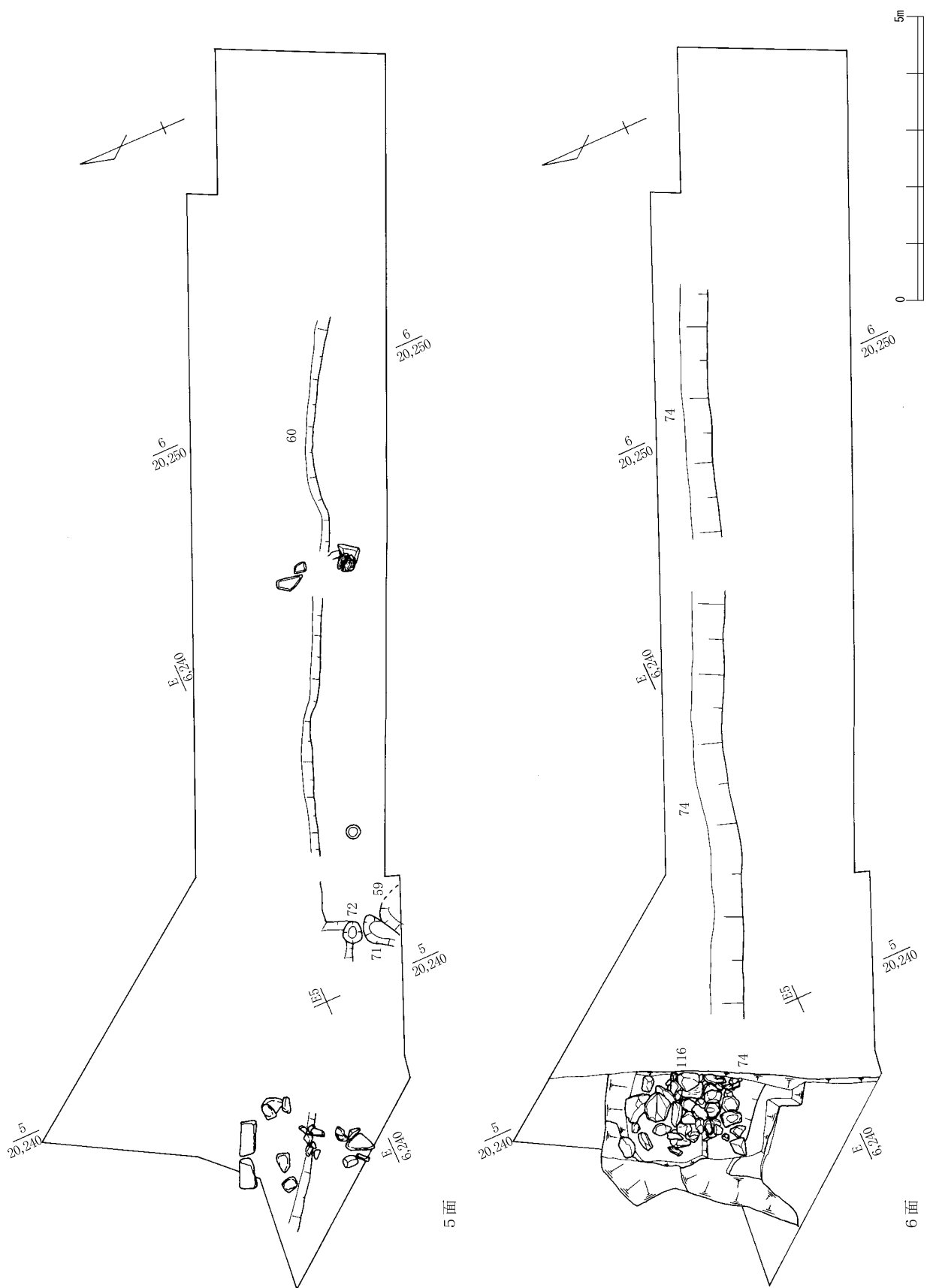
第6図 FKJ98-9 土層断面図2 (縮尺 1/50)



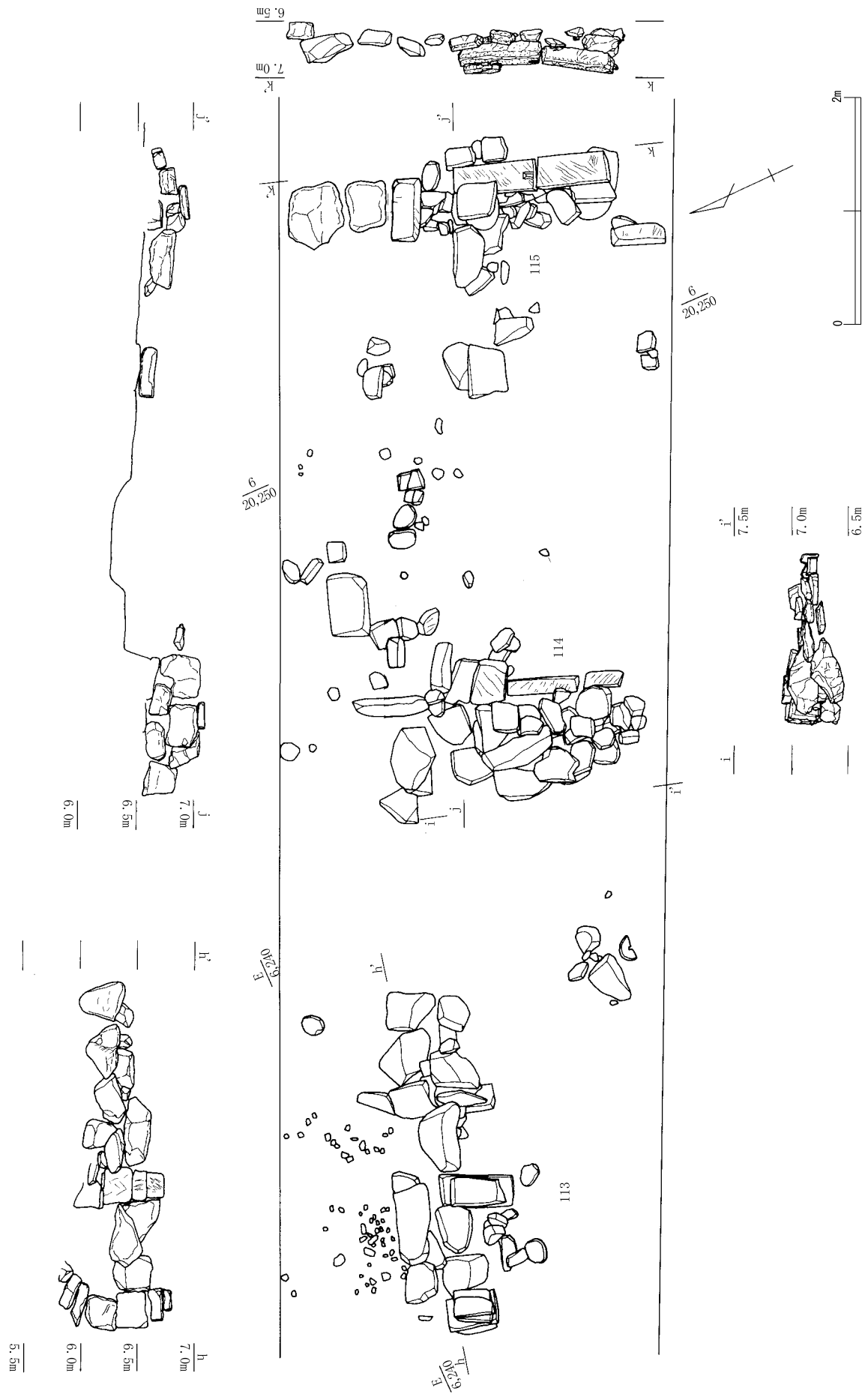
第7図 Fkj99-2遺構配置図1 (縮尺1/100)



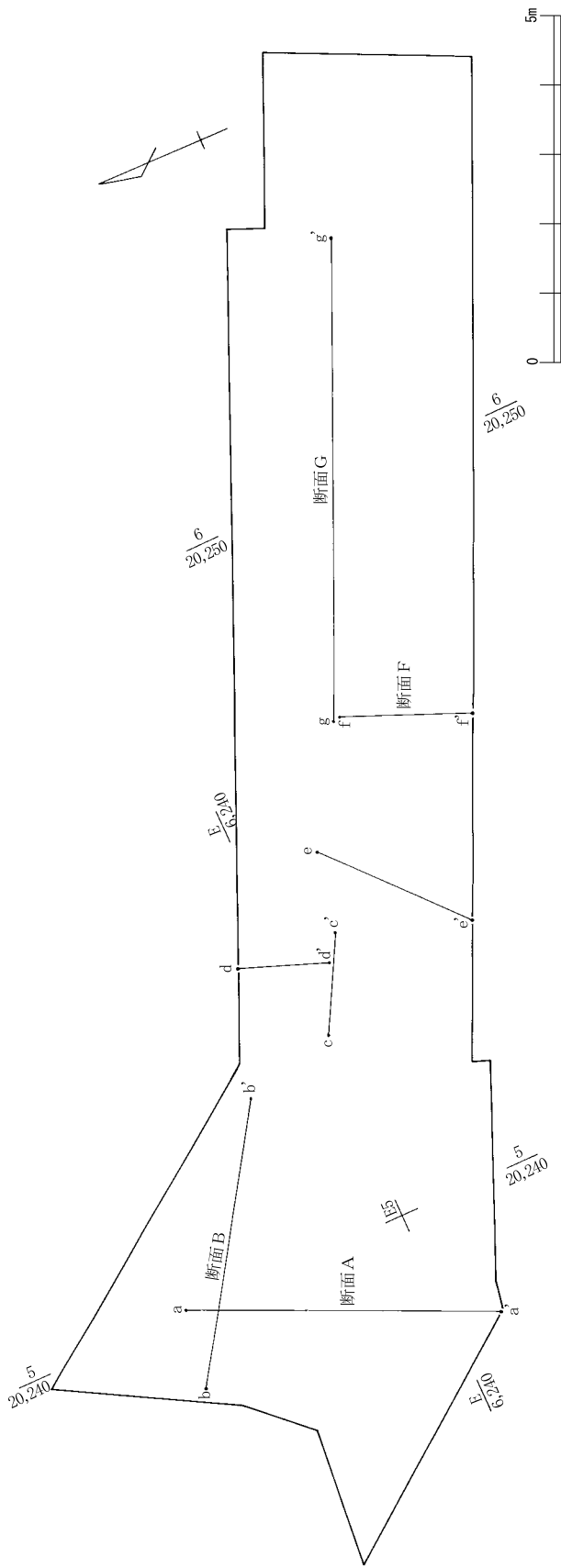
第8図 FKJ99-2 遺構配置図2 (縮尺 1/100)



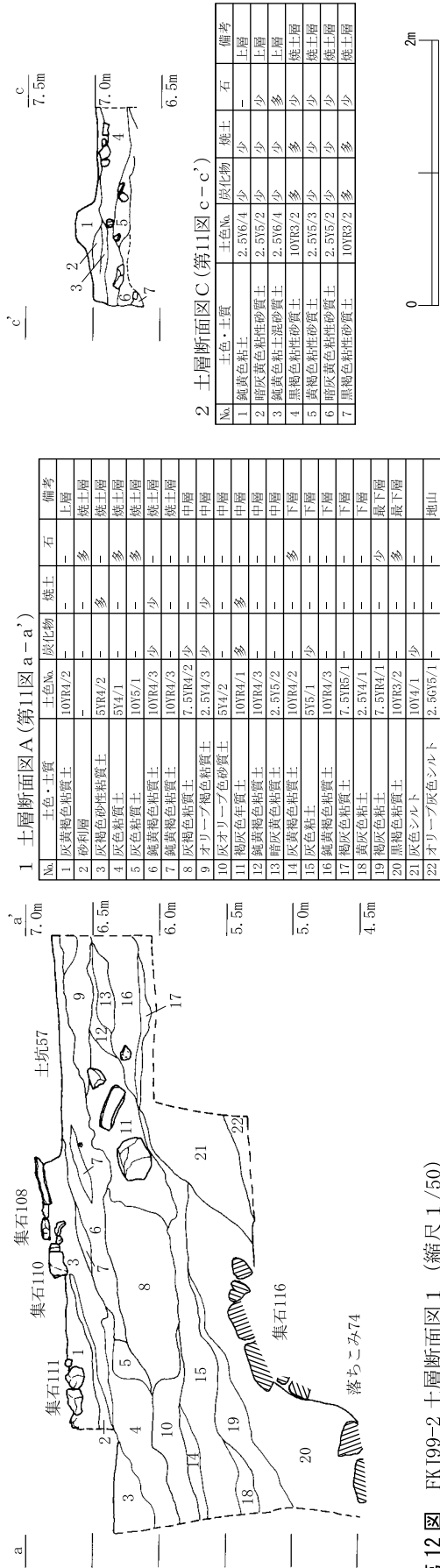
第9図 FKJ99-2 遺構配置図3 (縮尺 1/100)



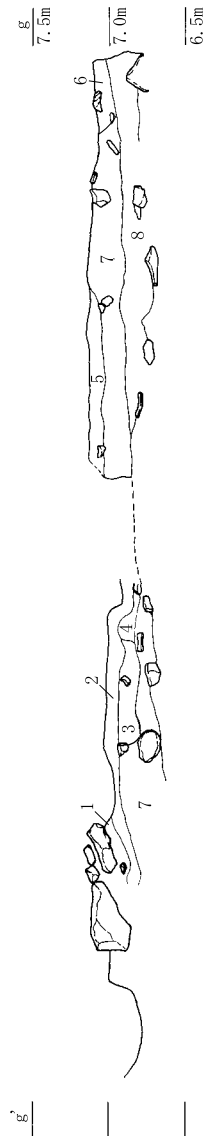
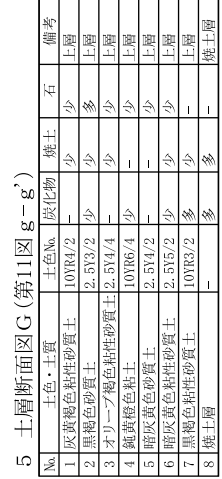
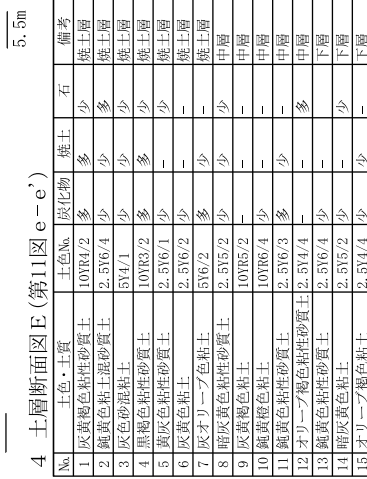
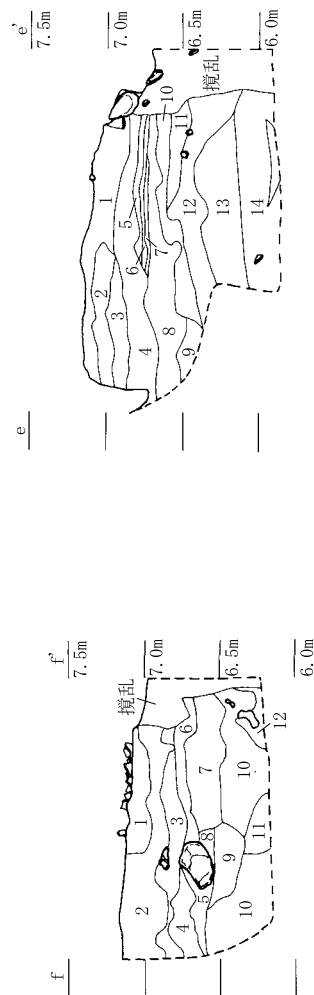
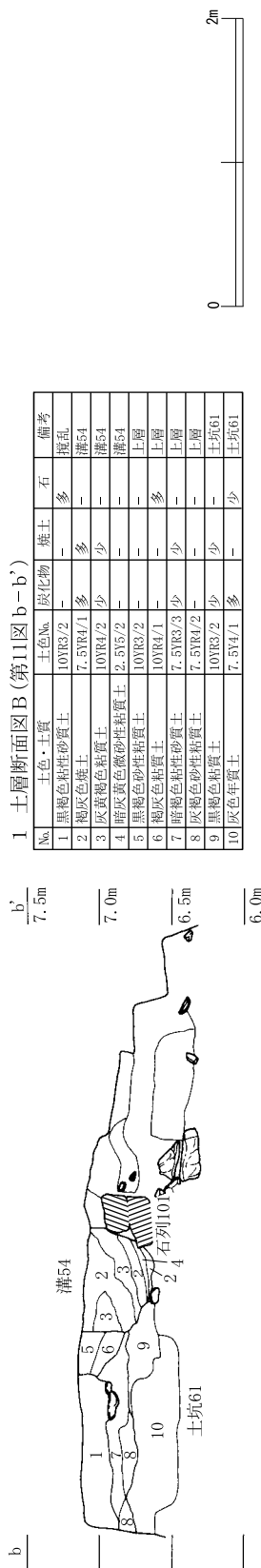
第10図 石列113・114・115平・立面図(縮尺1/50)



第11図 FKJ99-2 土層断面ポイント図 (縮尺 1/100)



第12図 FKJ99-2 土層断面図1 (縮尺 1/50)



第4章 遺物

第1節 陶磁器・瓦(第14～20図、第2表)

FKJ98-9 調査区出土の遺物は、小片をわずかに含む程度であったため図化していない。ここではFKJ99-2 調査区出土の遺構および包含層から出土したもの121点を図化した。肥前、瀬戸・美濃をはじめ、在地系の土師質土器皿や播鉢などがみられ、築城当時の生活を窺うことができる。以下、遺構ごとに陶磁器の概要を述べる。また、土師質皿は第2節にて系統別にまとめて報告する。

遺構52(第14図) 52-1は伊万里の染付皿である。見込蛇の目釉剥ぎで、Ⅱ-2期に分類される。2は鉄釉の天目茶碗で登窯期のものである。3は越前の播鉢であり、Ⅵ期に分類される。口縁に沈線が入る。

遺構54(第14図) 磁器は全て伊万里である。54-1は碗である。草花文を染付で描き、暈付に砂が熔着する。3は皿である。染付でススキを描き全面に透明釉を施釉する。Ⅱ-2期に分類される。4～8は唐津の灰釉皿である。9は越前の壺である。赤土と鉄釉を施釉する。Ⅵ-2期に分類される。10は李朝の甕である。口縁部に窯道具または製品の熔着痕がある。内外面に灰釉と褐釉を施す。

遺構55(第14図) 55-1は肥前系の呉器手碗である。高台内まで施釉し口縁部に緑釉を施す。Ⅲ期に分類される。2は伊万里の皿である。見込蛇の目釉剥ぎで高台は無釉である。3は唐津の片口鉢である。口縁部は折り返し玉縁状に成形する。内外面はハケで白泥を施し灰釉を施釉する。

遺構57(第14・15図) 57-1は景德鎮の青花碗である。型打ち成形で内面に花文を施す。口縁部は輪花状に成形する。外面に波と馬を描く。2～6は全て伊万里である。2は染付碗で、一重網目文を描く。Ⅲ期に分類される。3は香炉である。4～6は皿である。4は口縁部に口サビを施す。染付で東屋が描かれ、吹墨を施す。5・6は染付で魚を描く。Ⅱ-2期に分類される。7は唐津の大皿である。ハケで白泥を施し緑釉を施釉する。8は唐津の鉢である。鉄釉のちハケで白泥を塗布し、部分的に緑釉を流し掛ける。Ⅲ期に分類される。9は越前の甕である。肩部にヘラ記号を持つ。Ⅵ-2期に分類される。表面は光沢が無く黒灰色で粗い。10は越前の甕である。時期はやや新しく、紛れ込みの可能性が高い。肩部2箇所判読不明なヘラ記号がある。11・12は越前の播鉢である。共にⅥ期に分類される。

遺構60(第15図) 60-1・2は唐津である。1は灰釉の片口鉢であり、鉄絵が施される。2は灰釉の皿である。3は越前の播鉢である。内外面に赤土が塗られ、口縁は丸みがある。Ⅶ-3期と考えられる。

遺構61(第16図) 61-1・2は唐津である。1は灰釉の鉢である。内面は打ち刷毛目で白泥を施す。見込蛇の目釉剥ぎである。Ⅲ期に分類される。2は瓶である。内外面にタタキによる工具痕が確認できる。頸部は後からロクロ成形で貼り付けるが、口縁部は欠損している。

遺構62(第15図) 1は唐津の碗である。鉄釉を施し、腰以下無釉である。Ⅳ期に分類される。

遺構104(第16図) 104-1は越前の甕である。ねじ立て成形で、赤土を施す。Ⅵ期に分類される。

遺構110(第16図) 110-1は越前の甕である。ヘラ記号があり、赤土を施す。Ⅶ期に分類される。

遺構112(第16図) 112-1は志野の筒型碗である。体部に一条の凸線を巡らせる。長石釉を全体に施釉し、暈付のみ無釉である。大窯期の第4段階に分類される。2は唐津の甕である。タタキによる工具痕があり、口縁部は玉縁状に成形する。内外面に赤土を塗り外面には鉄釉を施す。

遺構114(第16図) 114-1は伊万里の青磁碗である。青磁釉を施釉するが、高台のみ鉄錆で装飾する。暈付は露胎する。底部のみ赤く発色させる方法は17世紀中頃から18世紀前半に流行した技法である。

遺構115(第16図) 115-1は唐津の鉄絵向付である。2は越前の甕である。内面は赤土を塗り、外面は鉄釉を塗布する。肩部にへう記号が確認できる。Ⅵ期に分類される。

遺構117(第16図) 117-1は伊万里の碗で、淡い発色の染付である。2は瀬戸・美濃の小坏である。高台は平高台に近く削り込みは浅い。全面に長石釉を施釉する。登窯期の2段階に分類される。

遺構118(第16図) 118-1・2はいぶしの軒丸瓦である。凹面に布目を持ち、凸面はへう状工具で丁寧になでる。瓦当(欠損)と丸瓦の接合面に櫛目がみられる。1は直径1.6cmの釘穴が2箇所確認できる。

カクラン(第17図) カ-1は伊万里の碗である。濃い染付で草花文を描き、透明釉を施す。畳付のみ無釉である。Ⅳ期に分類される。カ-2は志野の向付である。長石釉を全面に施釉し鉄絵を施す。カ-3は唐津の鉢である。白泥に鉄絵を施し、灰釉と緑釉を流し掛ける。腰部から畳付直上まで赤土を塗布する。カ-4は唐津の片口である。ロクロ成形であり、注口部を貼付けた後、簡単になでる。見込から畳付まで全面に赤土を塗布し、見込から腰まで鉄釉を施釉する。口縁端部は釉が剥離していることから、伏せて焼成されたと考えられる。カ-5は唐津の蓋である。つまみの部分は欠損しているが、外面に緑釉を施釉する。カ-6は唐津の瓶である。内面は赤土を塗り外面は鉄釉を施釉する。回転糸切り痕が残る。カ-7は唐津の甕である。内外面に赤土を塗る。内面には格子状の当て具痕がみられる。Ⅱ～Ⅲ期に分類される。カ-8は唐津の瓶で、粘土紐積み上げ成形である。内面はタタキの当て具痕がある。底部裏面まで赤土を塗布し、鉄釉を施釉する。頸部は灰釉と藁灰釉を流し掛ける。カ-9は越前の壺である。内外面に鉄釉を施釉する。口縁部の形状は欠損しているため不明である。

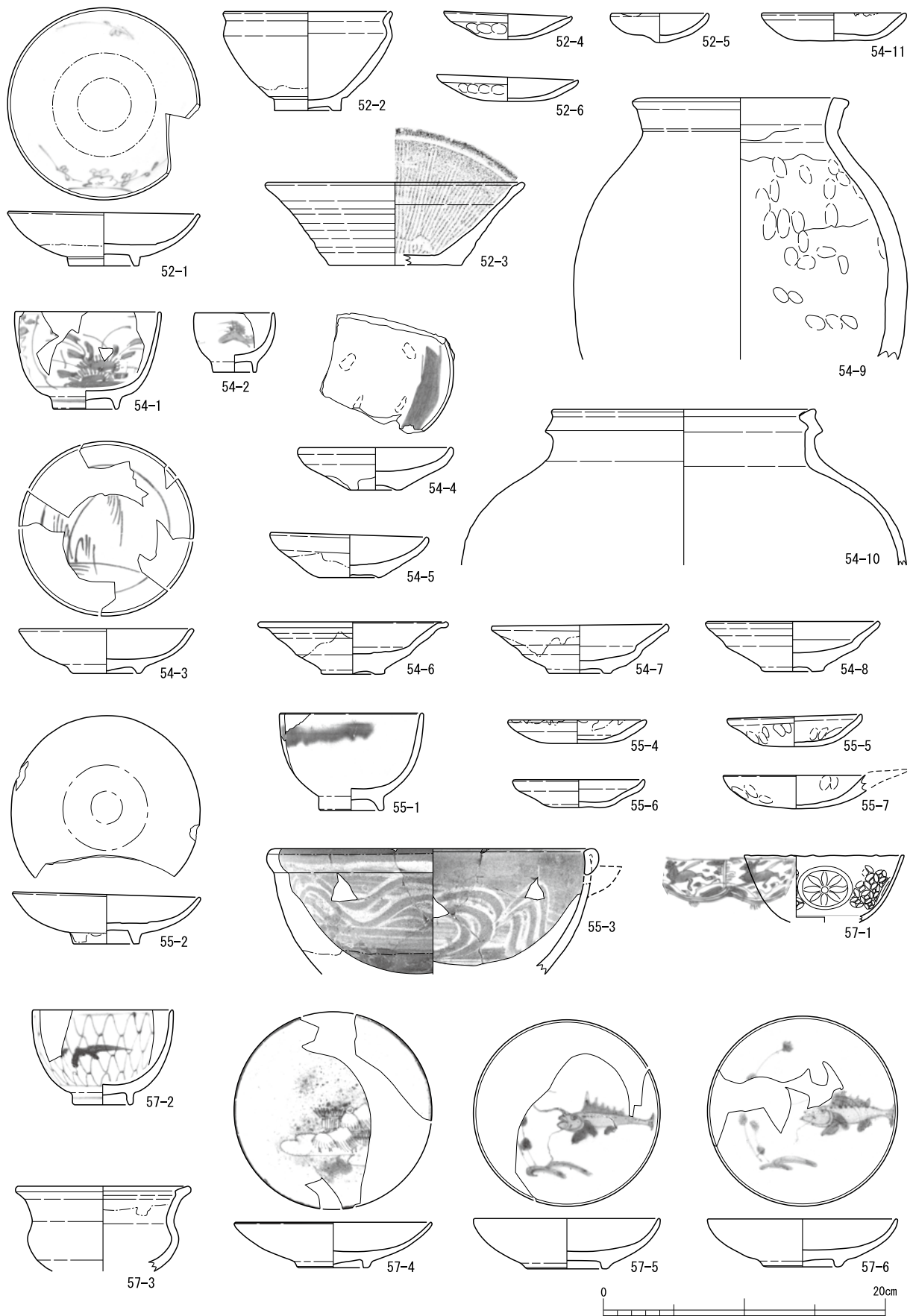
上層(第17図) 伊万里の染付碗(上-1・2)、皿(上-3・4)、白磁小坏(上-5)、油壺(上-11)、唐津の碗(上-8～10)、播鉢(上-13)、瀬戸・美濃の鉄釉碗(上-6・7)、越前の灰釉香炉(上-12)がある。1は家屋、船、山が描かれる。透明釉の釉縮みが激しく、欠陥品であったと思われる。4はロクロ成形で削り出高台である。口縁部直下から削り出す。見込蛇の目釉剥ぎだが、蛇の目状に削られておらず渦巻状になる。13は口縁部を外側に折り返して玉縁を作り、口縁部にのみ鉄釉を塗る。不明瞭だが7条の櫛目が確認できる。上層には、17世紀前半から18世紀後半の遺物が含まれる。

焼土層(第18図) 伊万里の染付碗(焼-1～3)、皿(焼-6)、小皿(焼-10)、小坏(焼-4)、玩具碗(焼-5)、唐津の皿(焼-7・9)、花瓶(焼-11)、播鉢(焼-12)等がある。焼-8は漳州窯の皿で、型打ち成形後に瑠璃釉を施釉する。県内では出土例が少なく、白く浮き出た装飾の特徴から餅花手と呼ばれる。

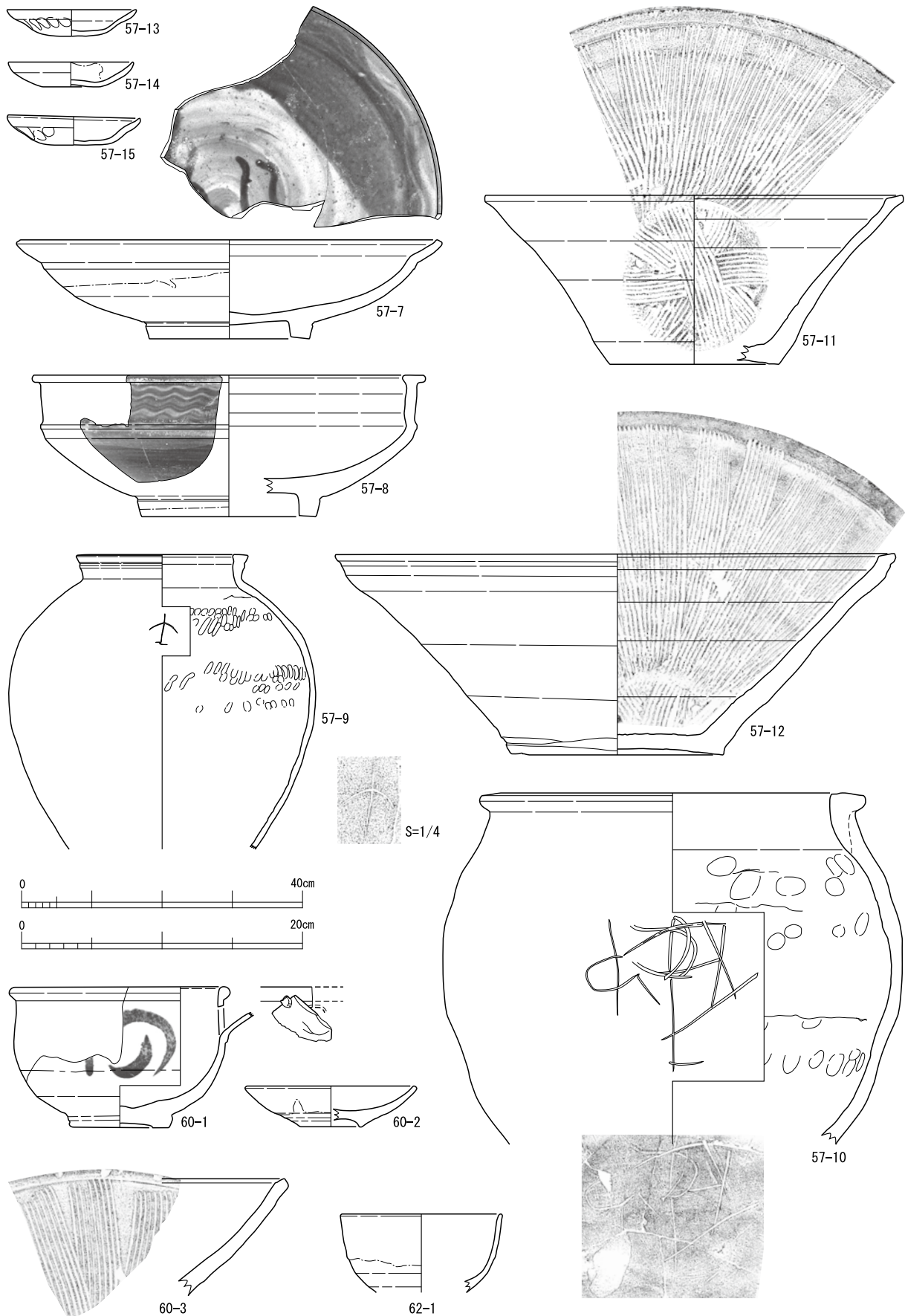
中層(第18図) 伊万里の染付碗(中-1・2)、皿(中-8・13)、蓋(中-3)、唐津の碗(中-4)、皿(中-12)、小坏(中-5)、瀬戸・美濃の稜皿(中-9)、中国の白磁皿(中-11)、越前の播鉢(中-14)等がある。中-4は灰釉を施釉し高台は無釉である。中-6・7は瀬戸・美濃の鉄釉天目茶碗で、登窯Ⅰ期のものである。中-10は京焼の軟質施釉陶器である。内面に黒釉を施釉し、高台は丸みがあり浅く削り出す。

下層(第19図) 伊万里の筒型碗(下-9)、唐津の碗(下-10・11・19)、皿(下-5・12・13・14)、瀬戸・美濃の碗(下-2)、緑釉皿(下-3)、越前の播鉢(下-4)等がある。下-1は唐津の鉄釉壺または甕で、底部に貝目痕が見られる。下-6は景德鎮の青花碗である。芙蓉手で口縁部は輪花状に成形する。下-7は龍泉窯の青磁碗である。下-8は漳州窯の青花皿である。畳付と腰部に砂が熔着する。下-19は唐津の灰釉碗である。Ⅱ-1期に分類される。高台は無釉であり、腰部に砂が熔着する。

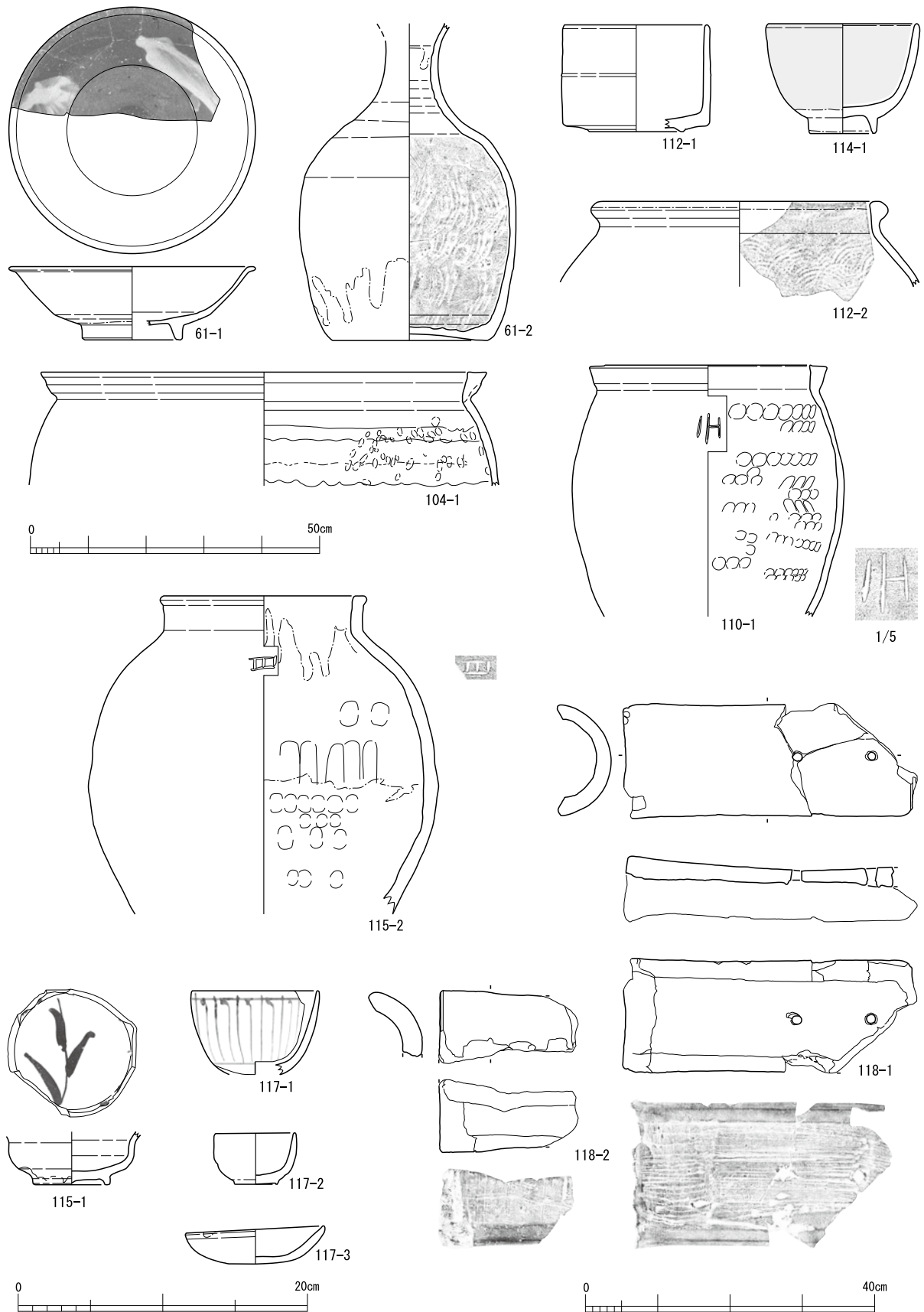
最下層(第19・20図) 唐津の灰釉碗(最下-1～3)、皿(最下-4・5・7～9)、瀬戸・美濃の丸皿(最下-6・10)、越前の播鉢(最下-12・13)等がある。最下-11は磁州窯の鉄絵皿である。見込蛇の目釉剥ぎで、外面は口縁部直下より無釉である。二次焼成を受けて破損し、断面に漆継ぎ痕が確認できる。



第14図 土器・陶磁器実測図1 (縮尺1/4)



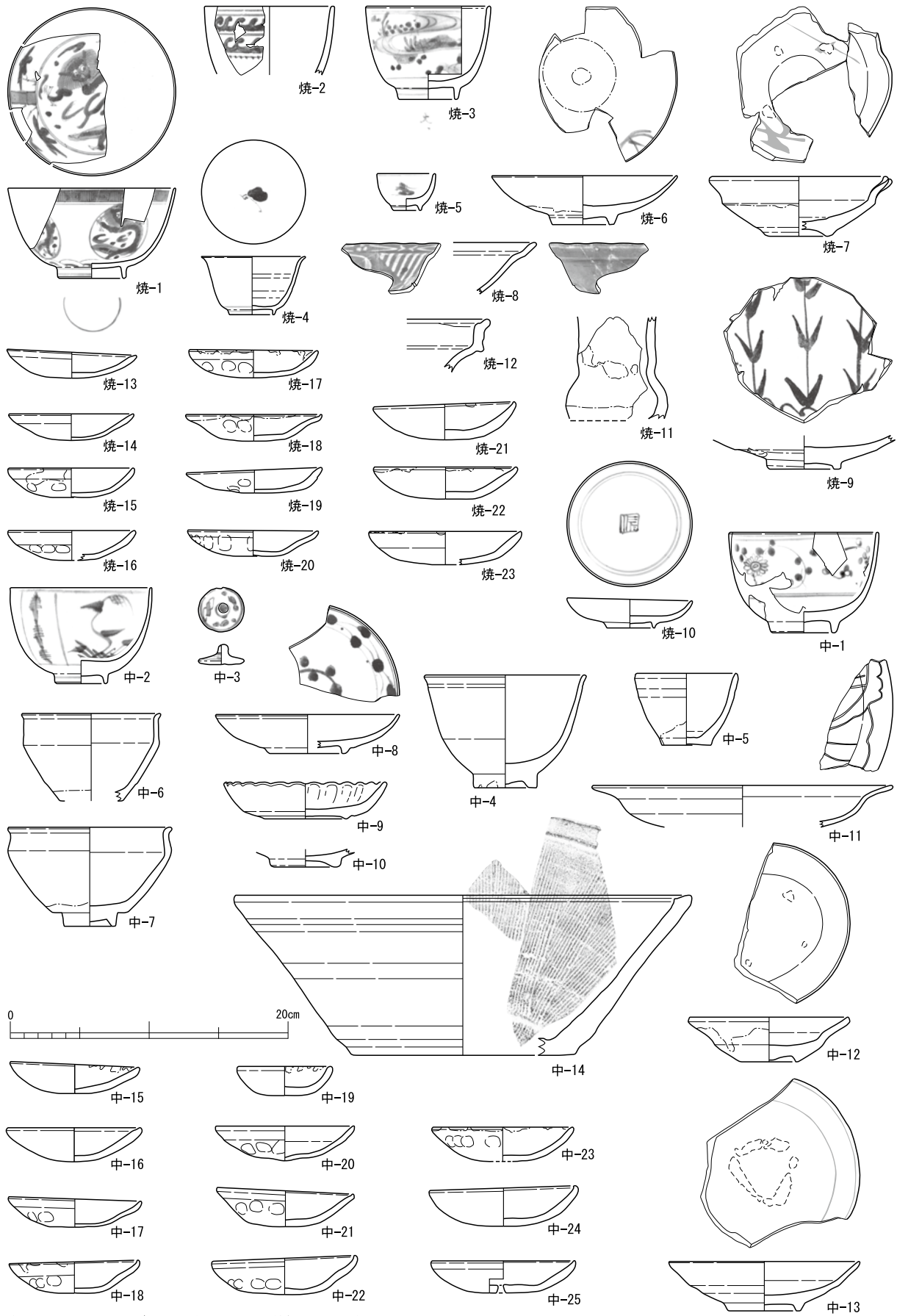
第15図 土器・陶磁器実測図（縮尺1/4, 57-9 : 1/8）



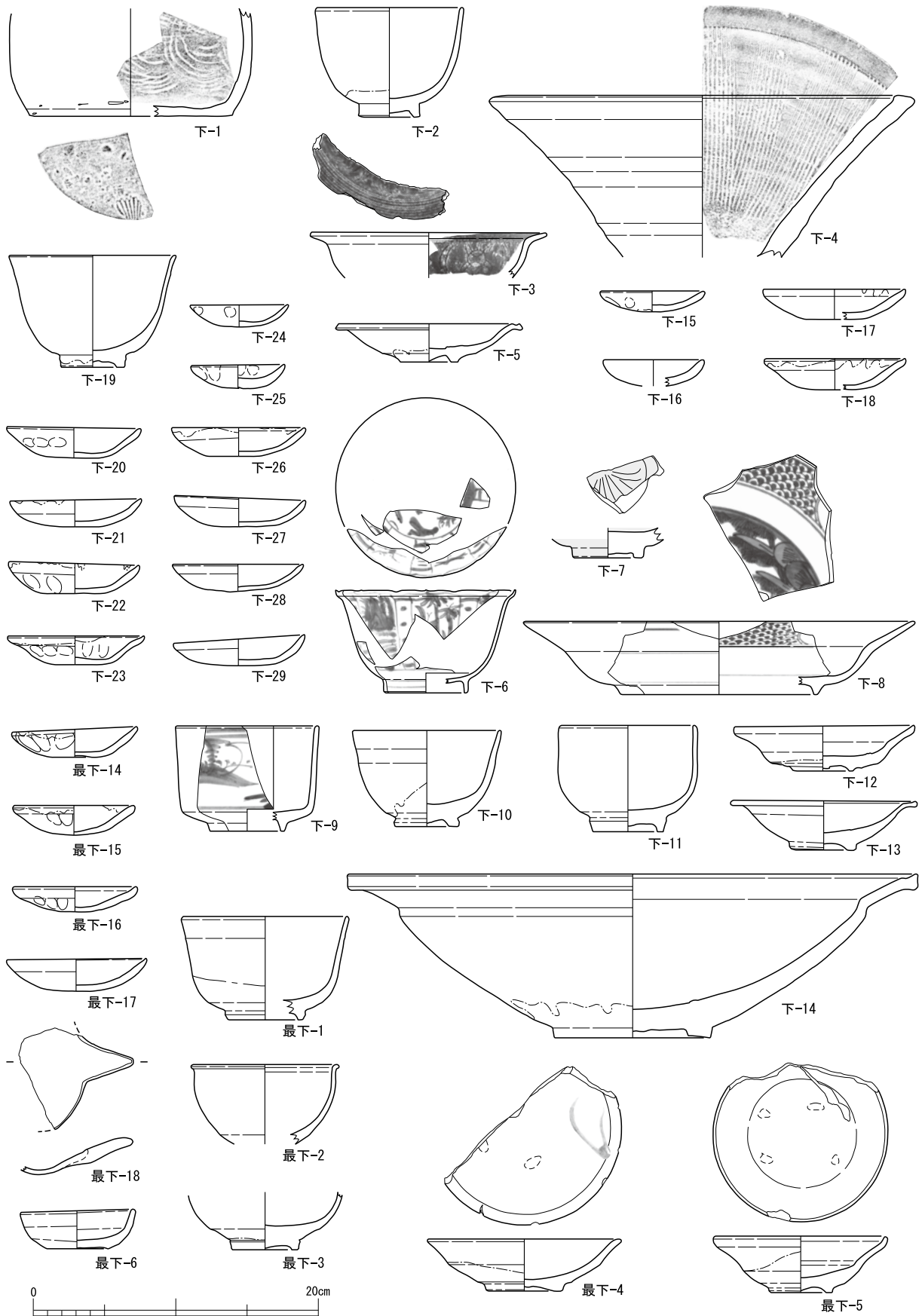
第16図 土器・陶磁器実測図3 (縮尺1/4, 118-1・2: 1/8, 104-1・110-1: 1/10)



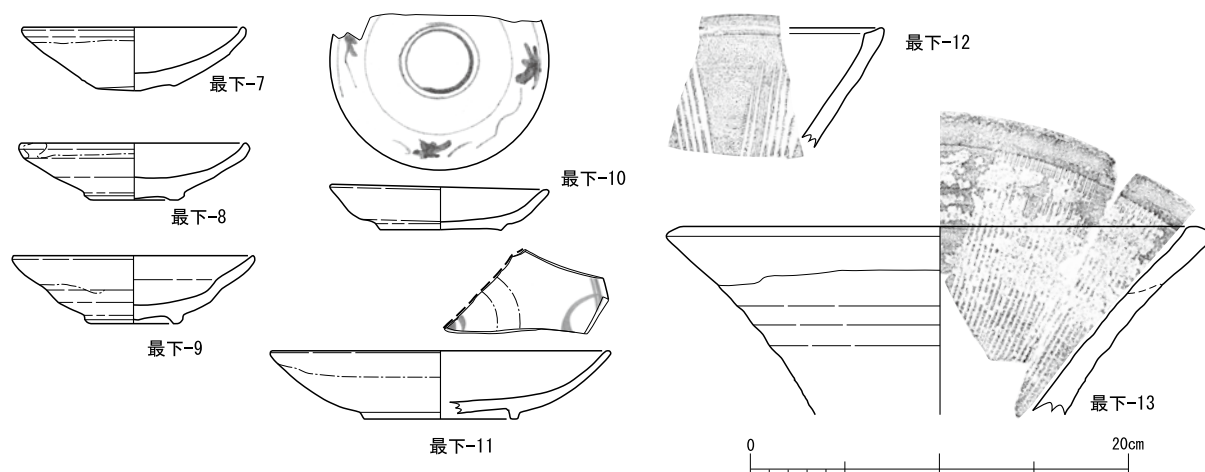
第17図 土器・陶磁器実測図4 (縮尺1/4)



第18図 土器・陶磁器実測図5 (縮尺1/4)



第19図 土器・陶磁器実測図6 (縮尺1/4)



第20図 土器・陶磁器実測図7（縮尺1/4）

第2節 土師質土器皿（第14～19図、第2表）

遺構及び包含層から出土したものの62点を図化した。これまでに報告されていたものに加え、A系（特）・C3系を追加した。以下、系統ごとに概要を述べる。

A系 口径6.5cm前後で手捏ねである。内外面にオサエの痕跡があり、口縁部は不整形で立ち上がる（カ-10、中-19、下-16・24・25）。**A系（特）** 成形方法等はA系と同じである。意図的かは不明であるが、通常のヘソ皿の逆で、見込み部分を外に向かって押し出していることからA系とは分けた。今回確認したものは、52-5のみである。**B系** 口径6.9cm前後で手捏ねである。口縁部はやや開き、器壁は薄い。底部は平坦である（カ-11）。**C系** 口径9.5cm前後で手捏ねである。見込まで大きくなでており、口縁部端部をややつまむ。口縁に向かってくびれを持ちながら逆ハの字状に広がる。口縁部に厚みがあり、底部は比較的平面である（55-6・7、57-13～15、焼-15・18・20、中-15・17・18・21・23・25、下-17・18・20・23・29、最下-14～16・18）。中-25は、見込に5mm程度の穿孔がある。最下-18は把手を貼り付ける受け皿である。**C2系** 口径10cm前後で、成形方法はC系と同じである。厚みは均一であり、底部はやや丸い（55-7、117-3、焼-21・22、中-16・24、最下-17）。55-7は把手を貼り付ける受け皿である。**C3系** 口径9.0～9.5cm前後で、成形方法はC系とほぼ同じである。やや丸みのある底部で、C系の中では口縁部のつまみが弱い（カ-12～14、上-15、焼-13・16・17、下-26～28）。**D系** 口径は約9.0cm～10cmで成形方法はC系とほぼ同じである。器壁は均一で薄く、口縁は外方に開く（52-4・6、上-14・16、焼-14）。**E系** 口径10cm程度で手捏ねである。見込に圏線を持つ。口縁に向かってやや外方に開き、口縁に沿って横になでる。底部は平面である（55-4・焼-23）。**K系** 口径9.5～10cm前後で手捏ねである。口縁部外面直下に段が付くほど強くなでる。底部はやや平面である。強いナデのため、口縁部が立ち上がる（上-17・焼-19・中-20・下-21）。土師質土器皿は同系統の中で工具痕が残るものと残らないものがあり、さらに細分化できる可能性がある。今後の研究の課題としたい。

註

- 1 越前焼の分類は木村孝一郎「越前焼の編年的研究と生産地の動向」2011（『第10回山陰中世土器検討会資料集』山陰中世土器検討会編集）を参考にした。肥前陶磁器の分類は大橋康二『肥前陶磁』2001（ニュー・サイエンス社）を参考にした。瀬戸・美濃陶磁器の分類は『愛知県史 別冊窯業2 中世・近世瀬戸系』2008（愛知県史編纂委員会）を参考にした。
- 2 土師質皿の分類は福井県埋蔵文化財調査報告書第118集『福井城跡-JR北陸線外2線連続立体交差事業（高架側道5号線）に伴う調査-』2011を参考にした。A（特）・C3系は本稿にて追加した。

第2節 土師質土器皿

第2表 土器・陶磁器・瓦観察表

挿図番号	遺物番号	遺構番号	器種	産地	法量(cm)			陶磁器：釉薬・装飾 土師質皿：色調	成形・調整・その他	実測番号
					口径	底径	高さ			
16	52-1	52	皿	伊万里	13.6	5.60	3.9	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 見込蛇の目軸ハギ 高台無軸 梅文 II期	い5
16	52-2	52	天目茶碗	瀬戸美濃	10.0	4.7	7.05	鉄釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 登窯期	え27
16	52-3	52	搦鉢	越前	18.4	9.40	5.85	淡褐色	口縁部に沈線状の段 描目7条 断面褐色	い4
16	52-4	52	土師質皿	-	9.1	-	2.0	淡褐色	見込までナデ 口縁部外方に引く 器壁均一に薄い 板状圧痕 D系	い2
16	52-5	52	土師質皿	-	7.0	-	2.1	褐色	見込を外に向けて押し出す通常のヘソ皿の逆 A系特	い1
16	52-6	52	土師質皿	-	10.1	-	1.9	淡褐色	見込までナデ 口縁部外方に引く 器壁均一に薄い 板状圧痕 D系	い3
16	54-1	54	碗	伊万里	10.5	4.65	6.9	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 疊付砂熔着 見込窯クソ 楕円に歪む	う11
16	54-2	54	小坏	伊万里	5.6	3.10	4.1	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 見込窯クソ熔着	う2
16	54-3	54	皿	伊万里	12.4	4.80	3.15	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 疊付のみ無軸 二次焼成受ける 柳文	う8
16	54-4	54	皿	唐津	11.0	3.60	3.0	灰釉・鉄絵	ロクロ成形 削出高台 腰以下無軸 葦筒底風 見込胎土目痕	う6
16	54-5	54	皿	唐津	11.2	4.40	3.2	灰釉	ロクロ成形 削出高台 腰以下無軸 葦筒底風 見込胎土目痕	う5
16	54-6	54	皿	唐津	13.5	4.50	3.7	灰釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 見込、高台砂目積み痕	う3
16	54-7	54	皿	唐津	12.5	4.40	3.45	灰釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 見込、胎土目積み痕 脚付ハマ	う4
16	54-8	54	皿	唐津	12.4	4.40	3.55	灰釉	ロクロ成形 削出高台 底部焼成時のハゼ穴 見込胎土目痕 脚付ハマ	う7
16	54-9	54	壺	越前	15.3	-	(18.6)	鉄釉・赤土	ねじたて成形 内外面ナデのち赤土と鉄釉	う9
16	54-10	54	甕	李朝	18.6	-	(11.0)	灰釉・褐釉	ロクロ成形 口縁部窯道具・製品の熔着痕 内外面に施釉 釉薬は一部剥離している 器壁薄い	う10
16	54-11	54	土師質皿	-	10.2	-	1.95	浅黄橙	口縁部やや厚い 見込薄くナデ 板状圧痕 底部灯芯油痕 ?	う1
16	55-1	55	碗	唐津	10.2	4.60	6.9	銅緑釉・透明釉	ロクロ成形 削出高台 疊付のみ無軸 京焼風呉器手	う12
16	55-2	55	皿	伊万里	12.4	4.40	3.55	透明釉	ロクロ成形 見込蛇の目軸ハギ 削出高台 高台無軸 疊付砂熔着	う17
16	55-3	55	片口鉢	唐津	23.6	-	(8.9)	白泥・灰釉	ロクロ成形 削出高台 口縁端部、腰以下無軸 刷毛目	う18
16	55-4	55	土師質皿	-	9.8	-	1.7	淡褐色	見込に圈線 口縁に沿って横ナデ 灯芯油痕 E系	う13
16	55-5	55	土師質皿	-	10.0	-	(2.3)	浅黄橙	見込までナデ 口縁部ややつまむ C系	う16
16	55-6	55	土師質皿	-	9.4	-	2.0	褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ C系	う14
16	55-7	55	土師質皿	-	10.4	-	(2.4)	褐色	見込ナデ 口縁部ややつまむ 底部丸い 均一に厚い 把手貼付 底部擦化状の工具痕 C2系	う15
16	57-1	57	碗	中国(景德鎮)	11.4	-	(4.75)	呉須・透明釉	ロクロ成形 型打ち 削出高台 輪花状口縁 走馬文	あ1
16	57-2	57	碗	伊万里	10.0	4.20	6.7	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 疊付に砂熔着 一重網目文	あ2
16	57-3	57	香炉	伊万里	12.4	-	6.0	透明釉	ロクロ成形 口縁部直下より内面無軸	あ3
16	57-4	57	皿	伊万里	13.3	4.90	3.2	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 吹墨 ロサビ 疊付砂熔着 二次焼成受ける	あ11
16	57-5	57	皿	伊万里	13.2	5.90	3.55	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 疊付に砂熔着 魚文	あ4
16	57-6	57	皿	伊万里	13.4	5.60	3.4	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 魚文 二次焼成受ける	あ5
17	57-7	57	大皿	唐津	29.7	11.40	7.0	銅緑釉・灰釉・白泥	ロクロ成形 削出高台 見込に砂熔着	あ6
17	57-8	57	鉢	唐津	28.0	12.40	10.0	鉄釉・銅緑釉・白泥	ロクロ成形 削出高台 横刷毛目	あ10
17	57-9	57	甕	越前	24.5	-	(41.9)	暗褐色	ねじたて成形 内面指痕あり 肩部にヘラ記号 表面は灰色で粗い 二次焼成受ける	あ15
17	57-10	57	甕	越前	27.4	-	25.0	褐色	粘土紐接合部ハケによる縦ナデ 2箇所肩部ヘラ記号 断面灰色	あ14
17	57-11	57	搦鉢	越前	29.8	12.00	12.0	淡褐色	自然釉 断面灰色光沢あり 櫛目8条 VI-2古	あ12
17	57-12	57	搦鉢	越前	39.8	15.00	14.3	淡褐色	自然釉 断面灰色光沢あり 櫛目8条 VI-3	あ13
17	57-13	57	土師質皿	-	9.2	-	1.9	明褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ C系	あ7
17	57-14	57	土師質皿	-	8.9	-	1.75	淡褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ C系	あ8
17	57-15	57	土師質皿	-	9.4	-	2.15	淡褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ C系	あ9
17	60-1	60	片口	唐津	15.8	7.10	10.0	灰釉・鉄釉	ロクロ成形 削出高台 疊付回転糸切り痕 見込四足ハマ痕	い7
17	60-2	60	皿	唐津	12.2	4.40	2.9	灰釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 見込胎土目痕	い8
17	60-3	60	搦鉢	越前	-	-	(8.3)	褐色	ねじたて成形 赤土 櫛目9条 VII-3期 断面灰と褐色のマーブル状	い9
18	61-1	61	鉢	唐津	17.0	7.10	5.5	透明釉・白泥	ロクロ成形 削出高台 高台無軸	い10
18	61-2	61	瓶	唐津	10.6	-	(21.9)	鉄釉	粘土紐積み上げ成形のちタタキ 頸部貼付 高台無軸	い26
17	62-1	62	碗	唐津	11.5	-	5.6	鉄釉	ロクロ成形 外面削り	い11
18	104-1	104	甕	越前	74.2	-	(18.4)	赤土	ねじたて成形 内外面に赤土 鮮明でない窯印「大?」VI期	う19
18	110-1	110	甕	越前	38.5	-	40.6	褐色	ねじたて成形 赤土ハケ塗り 肩部ヘラ記号 赤色土 VII期古	い6
18	112-1	112	筒形碗	美濃(志野)	10.2	6.60	7.35	長石釉	ロクロ成形 削出高台 疊付無軸	え1
18	112-2	112	甕	唐津	25.0	-	(5.9)	赤土・鉄釉	粘土紐積み上げ成形 タタキ 青海波状当具痕 口縁部赤土のみ I期	え2
18	114-1	114	碗	伊万里	10.6	4.50	7.6	青磁釉・赤土	ロクロ成形 削出高台 腰から高台まで赤土のみ疊付露胎 青磁風	え3
18	115-1	115	向付	唐津	-	5.35	(3.65)	鉄絵・灰釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸	え5
18	115-2	115	甕	越前	14.3	-	(22.0)	赤土・鉄釉	ねじたて成形 内面赤土 肩部鉄釉 ヘラ記号	え4
18	117-1	117	碗	伊万里	8.9	-	(5.8)	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 薄い染付 二次焼成受ける	え6
18	117-2	117	小坏	美濃(志野)	5.7	3.00	3.5	長石釉	ロクロ成形 低い削出高台	え7
18	117-3	117	土師質皿	-	9.6	-	2.35	淡褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 底部丸い 均一に厚い 灯芯油痕 C2系	え8
18	118-1	118	軒丸瓦	-	長さ(40.5)	幅15.3	(8.6)	暗灰色・いぶし	タタラ成形 凹面布目 凸面タテナデ 丸瓦と瓦当接合部櫛目 瓦当・玉縁欠損 釘穴2点(径1.6cm)	え9
18	118-2	118	軒丸瓦	-	長さ(19.0)	幅(9.1)	(8.0)	暗灰色・いぶし	タタラ成形 凹面布目 凸面タテナデ 丸瓦と瓦当接合部櫛目 瓦当欠損	え10
19	カ-1	カクラン	碗	伊万里	10.2	5.20	6.9	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 疊付砂熔着 草花文 濃い染付	い24
19	カ-2	カクラン	向付	美濃(志野)	-	5.20	(5.2)	長石釉・鉄絵	ロクロ成形 削出高台	い16
19	カ-3	カクラン	鉢	唐津	21.3	8.60	6.15	白、鉄泥 灰、銅緑釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸	い14
19	カ-4	カクラン	片口	唐津	12.7	6.10	6.35	鉄釉・赤土	ロクロ成形 削出高台 注口貼付 口縁端部無軸 全面赤土	い23
19	カ-5	カクラン	蓋	唐津	6.2	-	(3.7)	白泥・銅緑釉	ロクロ成形 口縁部スス付着 二次焼成受ける 櫛目部欠損	い15
19	カ-6	カクラン	瓶	唐津	-	5.60	8.5	鉄釉	底部砂熔着 赤土のち内外面に鉄釉	い13
19	カ-7	カクラン	甕	唐津	15.2	-	7.1	鉄釉	粘土紐積み上げ成形 タタキのあて具痕 断面赤色の光沢	い12
19	カ-8	カクラン	瓶	唐津	5.6	10.00	23.95	赤土・鉄、薬灰釉	粘土紐積み上げ成形のちタタキ 頸部貼付 裏面赤土の鉄釉なし	い25
19	カ-9	カクラン	壺	越前	-	12.50	(15.4)	褐色	ねじたて成形 内外面鉄釉 断面灰色の光沢	い17
19	カ-10	カクラン	土師質皿	-	6.5	-	1.7	淡灰褐色	底部厚い 口縁部不均整で立上がる A系	い22
19	カ-11	カクラン	土師質皿	-	6.9	-	1.35	淡褐色	口縁部やや開く 器壁は薄い B系	い21
19	カ-12	カクラン	土師質皿	-	8.8	-	2.0	淡褐色	見込までナデ 底部丸い 口縁部のつまみ弱い C3系	い20
19	カ-13	カクラン	土師質皿	-	9.5	-	2.3	淡褐色	見込までナデ 底部丸い 口縁部のつまみ弱い C3系	い19
19	カ-14	カクラン	土師質皿	-	9.5	-	2.1	淡褐色	見込までナデ 底部丸い 口縁部のつまみ弱い C3系	い18
19	上-1	上層	碗	伊万里	11.3	4.80	6.2	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 輪櫛みが激しい	い47
19	上-2	上層	碗	伊万里	9.9	4.80	6.7	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 一重網目魚文	い69
19	上-3	上層	皿	伊万里	14.0	5.10	3.35	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 漆継ぎ痕あり 明るい発色の染付	い49
19	上-4	上層	皿	伊万里	13.4	5.40	3.6	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 見込蛇の目軸ハギ 疊付砂熔着	え25
19	上-5	上層	小坏	伊万里	6.2	3.0	4.3	透明釉	ロクロ成形 削出高台 疊付砂熔着	い72
19	上-6	上層	碗	瀬戸美濃	10.9	5.15	7.35	鉄釉・長石釉	ロクロ成形 削出高台 疊付無軸 意図的に体部窪ませる	い73
19	上-7	上層	碗	瀬戸美濃	10.2	-	(6.1)	鉄釉色・栗皮釉	ロクロ成形 栗皮釉と鉄釉掛け分け 登窯期	え26
19	上-8	上層	碗	唐津	10.0	-	(5.95)	灰釉	ロクロ成形 貫入	う65
19	上-9	上層	碗	唐津	10.6	5.15	7.45	灰釉	ロクロ成形 削出高台 疊付無軸 貫入あり 呉器手	い48
19	上-10	上層	碗	唐津	7.4	3.10	5.1	薬灰釉・鉄釉	ロクロ成形 削出高台 底部無軸	え11
19	上-11	上層	油壺	伊万里	-	-	(8.15)	呉須・透明釉	ロクロ成形 口縁部、底部欠損	う66
19	上-12	上層	香炉	越前	12.7	-	7.75	灰釉色	ロクロ成形 底部切離しのちナデ 脚部貼付 内外面灰釉流し掛け 底部無軸	え24
19	上-13	上層	搦鉢	唐津	-	-	(4.5)	鉄釉	ロクロ成形 口縁部折り返し 鉄釉 櫛目あり残存7条	え17
19	上-14	上層	土師質皿	-	8.8	-	1.8	淡褐色	見込までナデ 口縁部外方に引く 器壁均一に薄い 灯芯油痕 底部擦化状の工具痕 D系	え23
19	上-15	上層	土師質皿	-	9.2	-	1.75	淡褐色	見込までナデ 底部丸い 口縁部のつまみ弱い C3系	い76
19	上-16	上層	土師質皿	-	9.4	-	1.7	淡灰褐色	見込までナデ 口縁部外方に引く 器壁均一に薄い 口縁部重ね焼のムラ D系	え22
19	上-17	上層	土師質皿	-	10.1	-	2.3	淡灰褐色	見込ナデ 口縁部強いナデ(外面に段が付く) 底部はやや平面 灯芯油痕 K系	え21
20	焼-1	焼土層	碗	伊万里	12.1	5.10	6.5	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 器壁薄い 意匠に龍文	い67
20	焼-2	焼土層	碗	伊万里	15.4	-	(4.95)	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 ヘラ彫り 口縁端部無軸 波文 漆継ぎ	う64
20	焼-3	焼土層	碗	伊万里	5.0	4.70	6.7	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 高台内「大」 流水草花文 疊付砂熔着	い60
20	焼-4	焼土層	小坏	伊万里	7.5	3.50	4.2	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 疊付砂熔着	い61
20	焼-5	焼土層	碗	伊万里	4.2	2.10	2.6	呉須・透明釉	玩具 ロクロ成形 削出高台 疊付砂熔着	い62

第4章 遺物

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	器種	産地	法量(cm)			陶磁器・釉薬・装飾 土師黄皿：色調	成形・調整・その他	実測 番号
					口径	底径	高さ			
20	焼-6	焼土層	皿	伊万里	13.3	4.45	3.5	鉄絵・灰釉	ロクロ成形 削出高台 見込蛇の目軸ハギ 高台無軸 砂焙着 二次焼成受ける	い65
20	焼-7	焼土層	皿	唐津	8.2	4.80	4.3	鉄絵・灰釉	ロクロ成形 削出高台 口縁部輪花状 見込胎土目痕 二次焼成受ける	い64
20	焼-8	焼土層	皿	中国(漳州窯)	(20.0)	—	—	(3.7) 琉璃釉	型打ち成形 二次焼成を受ける 輪花状口縁 餅花手	い68
20	焼-9	焼土層	皿	唐津	—	5.40	(2.4)	鉄絵・灰釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸	い63
20	焼-10	焼土層	小皿	伊万里	9.0	5.45	2.15	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 疊付砂焙着 見込「幅」	う63
20	焼-11	焼土層	花瓶	唐津	—	—	(7.3)	灰釉	ロクロ成形 内外面灰釉 底部と体部の接合部ナデと思われるが底部欠損 漆継ぎ	え20
20	焼-12	焼土層	描鉢	唐津	—	—	3.8	鉄釉	ロクロ成形 口縁部にのみ鉄釉 櫛目不明 破片	い66
20	焼-13	焼土層	土師黄皿	—	9.4	—	2.1	褐色	見込までナデ 口縁部のつまみ弱い 裏面に擦化状工具痕 C 3系	い56
20	焼-14	焼土層	土師黄皿	—	9.0	—	1.9	褐色	見込までナデ 口縁部外方に引く 器壁均一に薄い 板状圧痕 D系	い58
20	焼-15	焼土層	土師黄皿	—	9.1	—	2.1	淡灰黄色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 裏面に擦化状の工具痕 C系	い59
20	焼-16	焼土層	土師黄皿	—	9.2	—	2.15	淡橙黄色	見込までナデ 底部丸い 口縁部のつまみ弱い 裏面に擦化状工具痕 C 3系	い57
20	焼-17	焼土層	土師黄皿	—	9.3	—	2.0	淡褐色	見込までナデ 底部丸い 口縁部のつまみ弱い 灯芯油痕 C系 裏面藁などの繊維の痕跡	い50
20	焼-18	焼土層	土師黄皿	—	9.8	—	1.9	淡灰褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 灯芯油痕 C系	い51
20	焼-19	焼土層	土師黄皿	—	5.8	—	1.85	淡橙黄色	見込ナデ 口縁部強いナデ(外面に段が付く) 底部はやや平面 板状圧痕 K系	い52
20	焼-20	焼土層	土師黄皿	—	9.4	—	1.9	淡褐色・密・堅緻	見込までナデ 口縁部ややつまむ C系	え19
20	焼-21	焼土層	土師黄皿	—	10.3	—	2.7	淡褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 底部丸い 均一に厚い 底部擦化状の工具痕 C 2系	い54
20	焼-22	焼土層	土師黄皿	—	10.4	—	2.3	褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 底部丸い 厚み均一 裏面擦化状工具痕 灯芯油痕 C 2系	い55
20	焼-23	焼土層	土師黄皿	—	11.0	—	(2.4)	淡褐色	見込に縁線 口縁に沿って横ナデ 灯芯油痕 E系	え18
20	中-1	中層	碗	伊万里	10.8	5.20	7.2	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 疊付無軸 薄い染付	い44
20	中-2	中層	碗	伊万里	10.2	3.80	6.9	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 疊付無軸 櫛目に至む	い37
20	中-3	中層	蓋	伊万里	3.3	—	1.45	呉須・透明釉	型押し成形 底部無軸	い46
20	中-4	中層	碗	唐津	11.7	4.60	8.1	灰釉	ロクロ成形 削出高台 疊付と高台内無軸 底部砂焙着 胎土緻密	い36
20	中-5	中層	小杯	唐津	7.4	3.60	5.15	灰釉	ロクロ成形 底部回転糸切りのちナデ	い42
20	中-6	中層	天目茶碗	瀬戸美濃	12.0	3.9	7.1	鉄釉色	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 登窯期	え15
20	中-7	中層	天目茶碗	瀬戸美濃	10.0	—	(6.3)	鉄釉・栗皮釉	ロクロ成形 削出高台 鉄釉流し掛け 腰部以下無軸	い41
20	中-8	中層	皿	伊万里	17.2	5.40	2.8	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 腰部まで砂焙着 呉須の発色悪い	い45
20	中-9	中層	稜皿	美濃(志野)	11.7	5.80	2.6	長石釉	ロクロ成形 型打ち 削出高台 口縁部輪花状 高台内無軸、ビン痕2点 二次焼成受ける	い40
20	中-10	中層	碗	京都?	5.7	—	(1.3)	鉄釉・灰釉	ロクロ成形 削出高台 釉薬剥離している 内黒の軟質施釉陶器 二次焼成受ける	い53
20	中-11	中層	皿	中国	21.0	—	(3.0)	白化粧土・透明釉	ロクロ成形 彫刻花文 貫入あり	い43
20	中-12	中層	皿	唐津	11.6	4.10	3.2	灰釉	ロクロ成形 削出高台 三日月高台 外面無軸 見込胎土目痕	い39
20	中-13	中層	皿	伊万里	13.7	5.20	3.55	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 全面施釉 見込、高台に砂目積み痕(腰部にも焙着) うすい染付	い38
20	中-14	中層	描鉢	越前	33.0	16.2	11.5	口縁部に薄い赤土	粘土紐積み上げ成形 ナデ 櫛目12条 口縁部薄い赤土	え12
20	中-15	中層	土師黄皿	—	9.4	—	2.3	淡褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 灯芯油痕 C系 体部に擦化状の工具痕あり	い27
20	中-16	中層	土師黄皿	—	9.8	—	2.45	淡褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 底部丸い 均一に厚い 板状圧痕 C 2系	い28
20	中-17	中層	土師黄皿	—	10.2	—	2.45	淡褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 灯芯油痕 C系 体部に擦化状の工具痕あり	い30
20	中-18	中層	土師黄皿	—	9.4	—	2.4	淡褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 灯芯油痕 C系	い31
20	中-19	中層	土師黄皿	—	6.8	—	2.2	淡褐色	底部厚い 口縁部不均整で立上がる 灯芯油痕 A系	え14
20	中-20	中層	土師黄皿	—	10.0	—	2.6	淡褐色	見込ナデ 口縁部強いナデ(外面に段が付く) 底部はやや平面 擦化状の工具痕 K系	え13
20	中-21	中層	土師黄皿	—	9.9	—	2.8	淡灰黄色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 灯芯油痕 C系	い34
20	中-22	中層	土師黄皿	—	10.5	—	2.8	淡橙黄色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 均一に厚い 板状圧痕 C 2系(底部平坦)	い33
20	中-23	中層	土師黄皿	—	10.2	—	2.45	淡褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 灯芯油痕 C系	い29
20	中-24	中層	土師黄皿	—	10.8	—	2.9	淡灰褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 底部丸い 均一に厚い 裏面に擦化状の工具痕 C 2系	い32
20	中-25	中層	土師黄皿	—	10.4	—	2.3	淡灰黄色	見込までナデ 口縁部ややつまむ C系 中央に穿孔あり(5mm)	い35
21	下-1	下層	底部	唐津	—	14.2	(7.5)	鉄釉	粘土紐積み上げ成形 タタキ 青海波状当具痕 底部貝目積み痕	う31
21	下-2	下層	皿	瀬戸美濃	10.4	4.4	7.65	鉄釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸	う29
21	下-3	下層	皿	中国	16.6	—	(3.2)	銅緑釉	ロクロ成形 輪花状口縁 線刻で花文 軟質	う27
21	下-4	下層	描鉢	越前	29.8	—	(11.4)	淡褐色	粘土紐積み上げ成形 ナデ 口縁部断面三角 櫛目10条 VI期	う32
21	下-5	下層	皿	唐津	13.1	4.0	2.7	灰釉色	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 見込砂目積み痕 高台砂目積みと製品の焙着	え16
21	下-6	下層	碗	中国(景德鎮)	12.6	5.60	7.2	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 輪花状口縁 芙蓉手 疊付無軸	う34
21	下-7	下層	碗	中国(龍泉窯)	—	5.0	(2.1)	青磁釉	ロクロ成形 削出高台 片切彫り	う22
21	下-8	下層	皿	中国(漳州窯)	27.4	13.80	5.1	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 腰部まで砂焙着	う23
21	下-9	下層	筒形碗	伊万里	10.1	5.20	7.35	呉須・透明釉	ロクロ成形 削出高台 疊付砂焙着 大ぶり	う28
21	下-10	下層	碗	唐津	10.4	4.3	6.7	灰釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸	い75
21	下-11	下層	碗	唐津	9.8	4.9	7.48	灰釉	ロクロ成形 削出高台 全面施釉 疊付砂焙着	う30
21	下-12	下層	皿	唐津	12.7	4.2	3.2	灰釉	ロクロ成形 削出高台 底部無軸 灯芯油痕	う20
21	下-13	下層	皿	唐津	13.1	4.6	3.5	灰釉	ロクロ成形 削出高台 磁器質 全面施釉 疊付に砂目積み痕	う21
21	下-14	下層	大皿	唐津	40.0	10.8	11.5	灰釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 見込に脚付ハマ三角形に焙着 高台に窯道具痕タコハマ?	う35
21	下-15	下層	土師黄皿	—	7.3	—	8.2	浅黄褐色	口縁部やや開く 器壁は薄い B系	う33
21	下-16	下層	土師黄皿	—	7.0	—	1.9	浅黄橙	底部厚い 口縁部不均整で立上がる A系	う24
21	下-17	下層	土師黄皿	—	10.0	—	2.1	にぶい橙	見込までナデ 口縁部ややつまむ 灯芯油痕 C系	う26
21	下-18	下層	土師黄皿	—	9.9	—	2.2	浅黄橙	見込までナデ 口縁部ややつまむ 灯芯油痕 C系	う25
21	下-19	下層	碗	唐津	11.7	4.5	7.85	灰釉色	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 腰部に砂焙着	う53
21	下-20	下層	土師黄皿	—	9.4	—	2.2	淡褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 外面擦化状の工具痕 C系	い74
21	下-21	下層	土師黄皿	—	9.2	—	1.95	浅黄褐色	見込ナデ 口縁部強いナデ(外面に段が付く) 底部はやや平面 灯芯油痕 K系	う61
21	下-22	下層	土師黄皿	—	9.2	—	2.25	灰白色	見込までナデ 底部丸い 口縁部のつまみ弱い 灯芯油痕 C 3系	う56
21	下-23	下層	土師黄皿	—	11.6	—	2.0	浅黄褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 灯芯油痕 C系	う59
21	下-24	下層	土師黄皿	—	6.9	—	2.7	褐色	底部厚い 口縁部不均整で立上がる A系	う55
21	下-25	下層	土師黄皿	—	6.6	—	2.7	浅黄褐色	底部厚い 口縁部不均整で立上がる A系	う54
21	下-26	下層	土師黄皿	—	9.3	—	2.0	にぶい橙	見込までナデ 底部丸い 口縁部のつまみ弱い 灯芯油痕 C 3系	う58
21	下-27	下層	土師黄皿	—	9.2	—	2.2	浅黄褐色	見込までナデ 底部丸い 口縁部のつまみ弱い C 3系	う57
21	下-28	下層	土師黄皿	—	9.2	—	2.3	にぶい橙	見込までナデ 底部丸い 口縁部のつまみ弱い 底部擦化状の工具痕 C 3系	う62
21	下-29	下層	土師黄皿	—	9.2	—	3.2	浅黄褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ C系	う60
21	最下-1	最下層	碗	唐津	11.8	5.6	7.25	灰釉	ロクロ成形 削出高台 腰から下無軸	う47
21	最下-2	最下層	碗	唐津	10.4	—	(5.6)	灰釉	ロクロ成形 腰部からケズリ 内面に溜クツ	う36
21	最下-3	最下層	碗	唐津	—	4.75	(4.0)	灰釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 疊付砂焙着 貫入	う40
21	最下-4	最下層	皿	唐津	13.6	5.0	3.6	灰釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 胎土目痕2点 鉄絵	う45
21	最下-5	最下層	皿	唐津	12.3	4.3	3.95	灰釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 見込胎土目痕4点	う37
21	最下-6	最下層	丸皿	美濃(志野)	8.1	4.30	2.75	長石釉	ロクロ成形 削出高台 見込と腰部にビン痕3点 見込に重ねた製品の長石釉が垂れる	い70
22	最下-7	最下層	皿	唐津	11.9	4.2	3.35	灰釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 見込胎土目痕3点	う38
22	最下-8	最下層	皿	唐津	12.2	5.3	3.0	灰釉	ロクロ成形 浅い削出高台 高台無軸 二次焼成受ける	う43
22	最下-9	最下層	皿	唐津	11.9	4.2	3.35	灰釉	ロクロ成形 削出高台 高台無軸 見込胎土目痕2点 外面二次焼成受ける	う39
22	最下-10	最下層	丸皿	美濃(志野)	11.6	6.40	2.45	鉄絵・長石釉	ロクロ成形 削出高台 前面釉 見込、高台内にビン痕 草花文	う44
22	最下-11	最下層	皿	中国(磁州窯)	18.0	8.20	3.6	鉄絵・透明釉	ロクロ成形 削出高台 見込蛇の目軸ハギ 漆継ぎ痕	う46
22	最下-12	最下層	描鉢	越前	31.4	—	(6.4)	淡褐色	粘土紐積み上げ成形 ナデ 櫛目8条 VI-2期 断面灰色	う41
22	最下-13	最下層	描鉢	越前	28.9	—	(9.9)	淡褐色	粘土紐積み上げ成形 ナデ 櫛目10条 VI-2期 焼成甘く、やわらかい 断面褐色	う42
22	最下-14	最下層	土師黄皿	—	8.9	—	1.9	灰白色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 灯芯油痕 C系 外面擦化状痕 指痕	う50
22	最下-15	最下層	土師黄皿	—	8.6	—	2.05	灰白色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 灯芯油痕 C系 中心部貫通しない刺突?あり 外面擦化状痕	う49
22	最下-16	最下層	土師黄皿	—	8.8	—	2.7	浅黄褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ C系	う48
22	最下-17	最下層	土師黄皿	—	9.8	—	2.3	灰色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 底部丸い 均一に厚い 底部擦化状の工具痕 C 2系	う51
22	最下-18	最下層	土師黄皿	—	—	—	(2.6)	浅黄褐色	見込までナデ 口縁部ややつまむ 灯芯油痕 C系 把手貼付のちナデ	う52

第3節 金属製品

金属製品は、おもに日用品とみられる製品と銭貨などが出土した。また、僅かながら鑄造に関連するとみられる遺物が出土しており、金属製でないものも含むが、あわせてここで扱う。以下、金属製品、銭貨、鑄造関連遺物に分ける。

1 金属製品(第21図、第3表)

金属製品として、残存状況が比較的良好な、煙管の吸口2点、椀、襖引手金具、下し金、灰匙、匙2点の8点を図示した。いずれも銅製である。

吸口(21-1・2) とともに羅字側に胴部が付かず、吸口端が膨らまない。

椀(21-3) 口縁は外側へ強く屈曲し、端部は丸くおさめるが、上端には面を持つ。体部は、外傾しつつ、やや内湾気味に強く立ち上がる。底面は、高台の付かない平底で、内面中央が盛り上がる。

襖引手金具(21-4) 破損して側縁部と奥の平らな板の部分とに分離している。正面形は、長楕円形もしくは細身の俵形となる。とくに装飾は認められない。

卸し金(21-5) 長方形になるものとみられるが、破損により全形を窺えない。卸し目は両面に付けられており、粗い目と細かい目がある。

灰匙(21-6) 柄の部分が欠失しているが、別造りの丸棒状の柄が装着されていたようである。

匙(21-7・8) とともに柄まで一体的なものである。柄は大きさに比して細長い。柄の断面形については、7は長方形、8は紡錘形である。

これら以外に、鉈、煙管(雁首・吸口)、釘、針金などがあるが、図化し得なかった。

2 銭貨(第23図、第5表)

検出した銭貨のうち比較的良好な状態の25点を掲示した。その内訳は、寛永通寶18点(23-8～25)と、景祐元寶(23-1)、至和元寶(23-2)、治平元寶(23-3)、元豊通寶(23-4)、紹聖元寶(23-5)、洪武通寶(23-6)、永樂通寶(23-7)各1点である。寛永通寶の内訳は、古寛永15点(23-8～22)、文銭1点(23-23)、新寛永2点(23-24・25)である。このほか、判読不能4点と一銭1点が出土した。

3 鑄造関連遺物(第22図、第4表)

鑄造に関連する遺物として確認したのは、取瓶と、鑄造素材の可能性のある鉛の塊である。

取瓶(22-1) 手づくねで、やや尖り気味の底部を丸くおさめる。内外面に著しい溶着物がある。

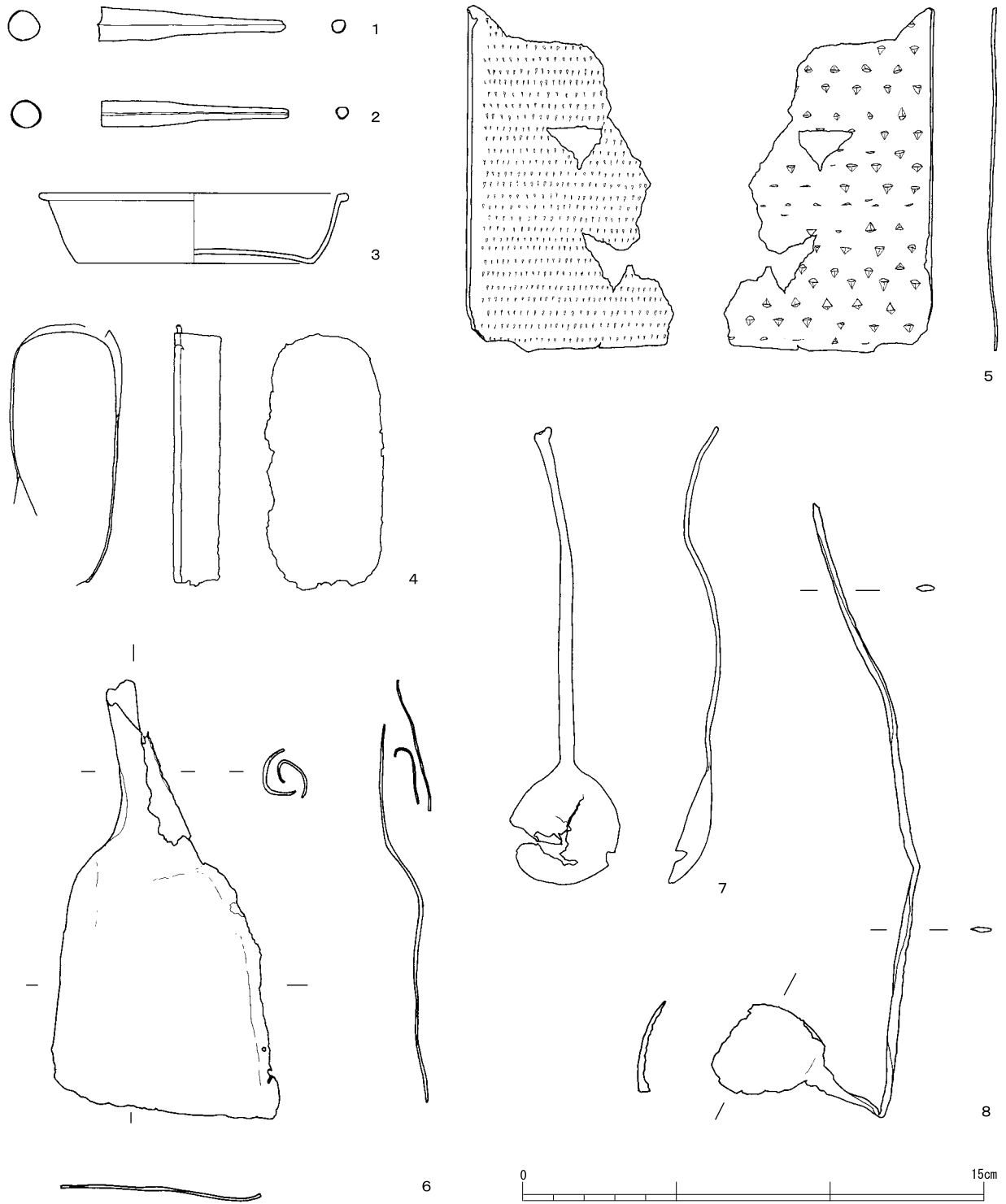
鉛素材(22-2) 本来は筒状の鑄造品とみられるが、平らに潰して一曲げした状態で固化している。必ずしも鑄造素材とは言い切れないが、意図的に熱して変形を加えているようにみえる。

第3表 金属製品観察表

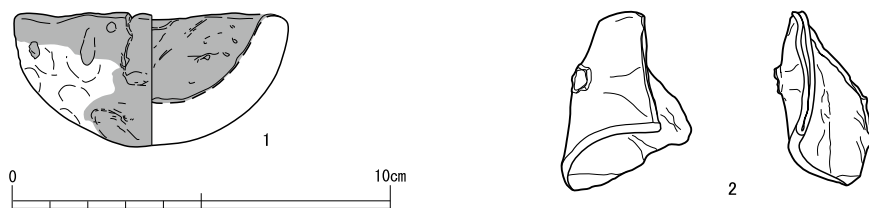
図版番号	遺物名	出土地点		計測値(cm)			素材	備考	出土遺構の 主な遺物の時期	遺物番号
		グリッド	遺構・層位							
21-1	煙管(吸口)	D-5	包含層	長6.1	胴部径1.15	吸口径0.45	銅		-	M992065
21-2	煙管(吸口)	D-5	114	長6.1	胴部径0.9	吸口径0.4	銅		17c中葉	M992070
21-3	銅椀	D-5	包含層	口径9.5	高2.3	底径7.6	銅	無高台・平底	-	M992064
21-4	襖引手金具	D-4	中層	縦8.5	横3.8	奥行1.6	銅	長楕円形	17c前～中葉	M992074
21-5	卸し金	E-4	57	縦10.7	横6.7	厚0.15	銅	両面おろし面(細・粗)	17c中～後葉	M992006
21-6	灰匙	E-4	上層	長14.3	幅7.1	厚0.1	銅	大判形	17c後葉～18c後葉	M992076
21-7	匙	D-6	55	長14.9	幅3.6	厚0.15	銅		17c中～後葉	M992068
21-8	匙	E-4	61	長26.9	幅3.1	厚0.2	銅	灰匙?	17c中～後葉	M992025

第4表 鑄造関連遺物観察表

図版番号	遺物名	出土地点		計測値(cm)			素材	備考	出土遺構の 主な遺物の時期	遺物番号
		グリッド	遺構・層位							
22-1	取瓶	E-4	最下層	口径7.2	器高3.4	器厚1.2	土	内面に溶着物付着。	17c初頭	M992160
22-2	鑄造素材?	E・D-4	54	縦4.7	横3.4	厚0.3	鉛	もともと筒状のものを変形。	17c前葉	M992018

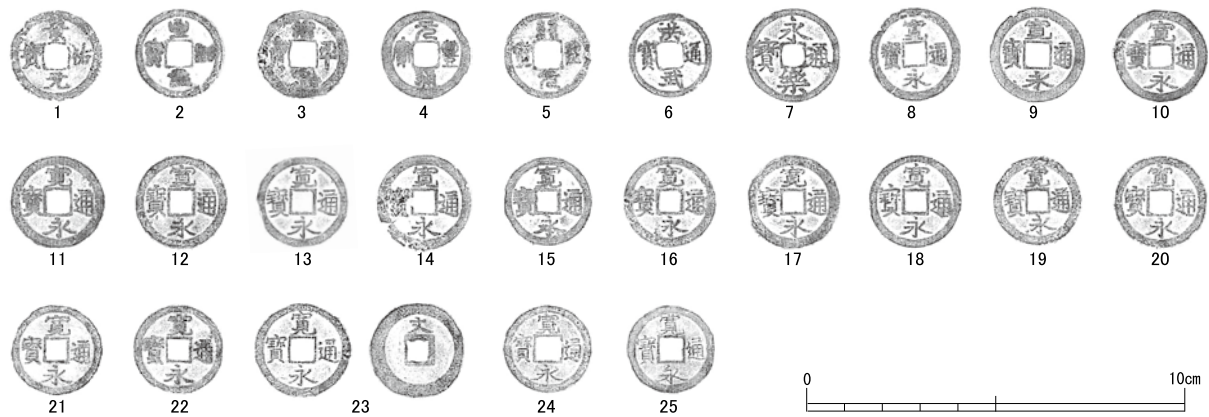


第21図 金属製品実測図（縮尺1/2）



第22図 鋳造関連遺物実測図（縮尺1/2）

第4節 石製品



第23図 銭貨拓影（縮尺1/2）

第5表 銭貨観察表

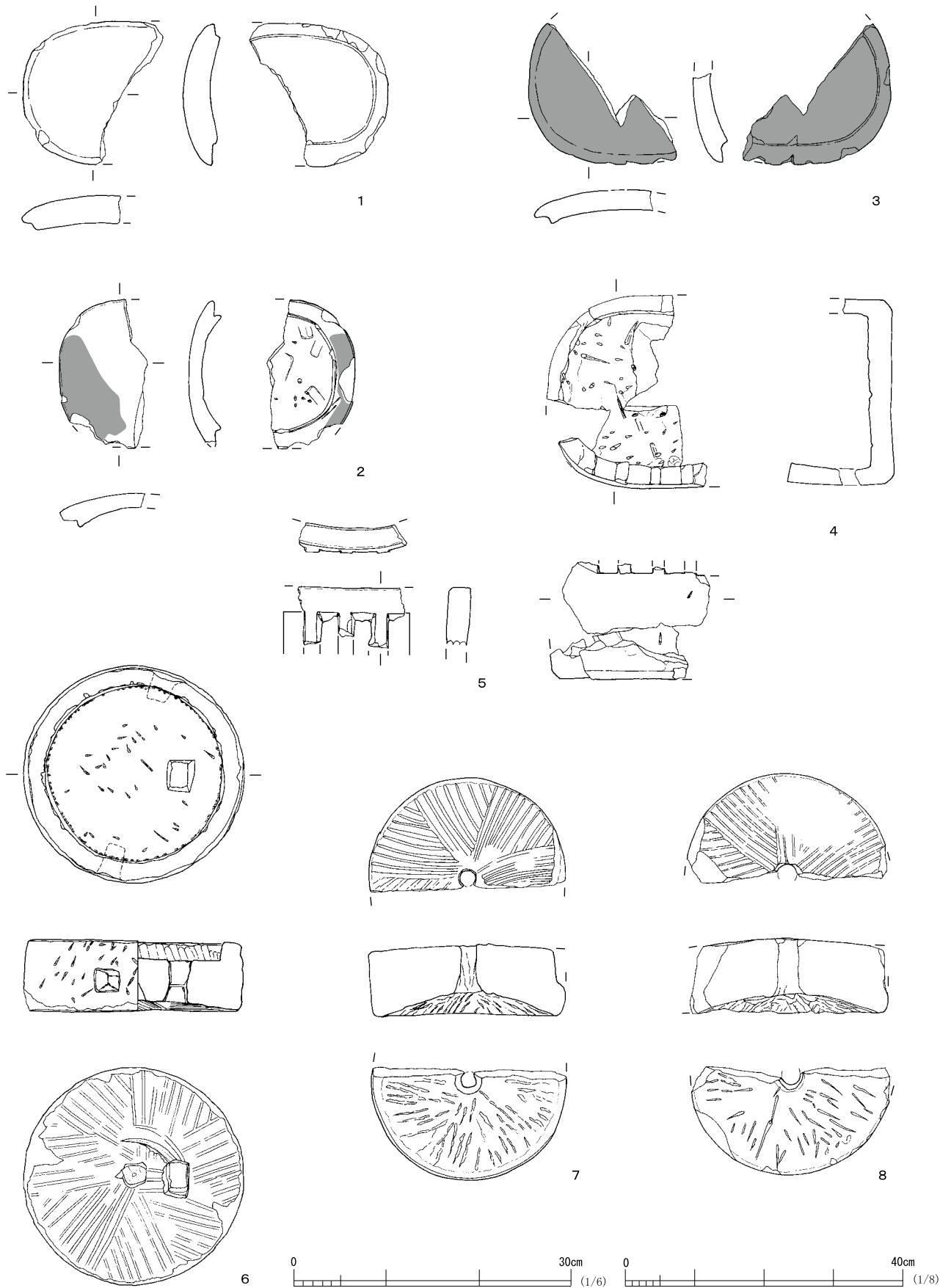
図版番号	銭文	初鋳	出土地点		計測値 (cm)			素材	備考	出土遺構の 主な遺物の時期	遺物番号
			グリッド	遺構・層位	径	内区径	方孔径				
23-1	景祐元寶	北宋1034	D-5	上層?	2.45	1.9	0.65	銅	真書	17c後葉～18c後葉	M992023
23-2	至和元寶	北宋1054	E-4	下層直上	2.3	1.9	0.65	銅	篆書	17c中葉以降?	M992031
23-3	治平元寶	北宋1064	D-6	焼土層	2.35	2.3	0.7	銅	真書	17c前～中葉	M992049
23-4	元豐通寶	北宋1078	D-6	115	2.3	1.8	0.65	銅	篆書	17c中葉	M992040
23-5	紹聖元寶	北宋1094	D-5	中層?	2.3	2	0.7	銅	篆書	17c前～中葉	M992029
23-6	洪武通寶	明1368	E-4	下層直上	2.2	1.85	0.65	銅	マ頭・単点通	17c中葉以降?	M992032
23-7	永楽通寶	明1408	E-4	下層	2.45	2.1	0.6	銅		17c初頭	M992002
23-8	寛永通寶	日本1636	D-5	上層	2.45	2	0.55	銅	古寛永	17c後葉～18c後葉	M992004
23-9	寛永通寶	日本1636	D-6	焼土層	2.5	1.95	0.6	銅	古寛永	17c前～後葉	M992005
23-10	寛永通寶	日本1636	E-4	57	2.5	1.95	0.55	銅	古寛永	17c中～後葉	M992007
23-11	寛永通寶	日本1636	E-4	57	2.45	1.95	0.6	銅	古寛永	17c中～後葉	M992008
23-12	寛永通寶	日本1636	E-4	57	2.45	2	0.6	銅	古寛永	17c中～後葉	M992009
23-13	寛永通寶	日本1636	E-4	中層	2.45	1.95	0.55	銅	古寛永	17c前～中葉	M992026
23-14	寛永通寶	日本1636	D-5	焼土層	2.5	1.95	0.55	銅	古寛永	17c前～中葉	M992027
23-15	寛永通寶	日本1636	E-4	中層	2.35	1.95	0.5	銅	古寛永	17c前～中葉	M992030
23-16	寛永通寶	日本1636	E-4	上層	2.4	1.95	0.55	銅	古寛永	17c後葉～18c後葉	M992033
23-17	寛永通寶	日本1636	E-4	上層	2.45	1.9	0.5	銅	古寛永	17c後葉～18c後葉	M992034
23-18	寛永通寶	日本1636	E-4	上層	2.4	2.05	0.5	銅	古寛永	17c後葉～18c後葉	M992035
23-19	寛永通寶	日本1636	E-4	上層	2.35	1.85	0.5	銅	古寛永	17c後葉～18c後葉	M992036
23-20	寛永通寶	日本1636	E-4	上層	2.45	2	0.6	銅	古寛永	17c後葉～18c後葉	M992037
23-21	寛永通寶	日本1636	D-6	焼土層	2.4	1.95	0.55	銅	古寛永	17c前～中葉	M992048
23-22	寛永通寶	日本1636	E・D-4	54	2.3	1.95	0.55	銅	古寛永	17c前葉	M992054
23-23	寛永通寶	日本1668	D-6	焼土層	2.5	2	0.55	銅	文銭	17c前～中葉	M992047
23-24	寛永通寶	日本1697	E-4	包含層	2.3	1.95	0.6	銅	新寛永	-	M992003
23-25	寛永通寶	日本1697	E・D-4	54	2.35	1.85	0.55	銅	新寛永	17c前葉	M992055

第4節 石製品

石製品は、確認したもののうち比較的状态の良好な18点を図示した(第24・25図、第6表)。その内訳は、行火5点(24-1～5)、石臼3点(24-6～8)、風炉(25-9)、容器状製品(25-10～13)、石瓦2点(25-16・17)、砥石(25-18)、不明品2点(25-14・15)である。石臼2点(24-7・8)が砂岩製、砥石が粘板岩製である以外は、いずれも凝灰岩製であり、おそらく笏谷石による製品とみられる。

行火(バンドコ)(24-1～5) いずれも別個体であり、全容を窺える状態ではないが、すべて楕円型の製品であることは判別できる。1～3は蓋、4・5は身の破片である。1～3を比較すると、蓋の大きさや厚さ、断面形状が様々であり、規格の多様な製品であることがわかる。4は煙出し孔列より下位の底部付近の破片である。底部内面のみ丸鑿の痕跡が残るやや粗い調整であるが、それ以外は平鑿により平滑に仕上げられる。5は煙出し孔部分から口縁部にかけての破片である。いずれも、被熱による変色や、煤などの付着が認められる。

石臼(24-6～8) いずれも粉挽臼であり、6は上臼、7・8は下臼である。7・8は大きさが近似し、石材が共通であるが、別個体の製品である。擦り目はいずれも8分画であるが、6は直線的で、



第24図 石製品実測図1 (縮尺1/6:1~5, 1/8:6~8)

7・8は湾曲する。擦り目の間隔はどれも一定しないため粗雑に見える。6・8は擦り目が使用により消失しつつある。なお、7・8の石材については、管見では越前地方、少なくともこれまで当埋文センターの実施した福井城の調査による出土品中には類例がないようであり、他地域から持ち込まれたことが考えられる。

風炉 (25-9) 口縁部片のみであり全容を窺い難いが、復元口径21cm程度の小型品となるようである。正面となる部分には開口部の一部が残存しており、復元口径から割り出される開口部の幅は7～8cm程度である。

容器状製品 (25-10～13) いずれも大半を欠失する破片であるが、口径に比べて体部の立ち上がりが短いため、分類上は盤として捉え得る。10は平面形が円形となる盤の体部から口縁部にかけての破片である。瓢形などになる可能性はあるが、円形であれば復元口径36cmとなる。11は平面形が方形もしくは長方形の盤の体部から口縁部にかけての破片である。12は間仕切りのある盤であるが、その間仕切り部分を境として大部分を欠失するものとみられ、本来は長方形となるようである。全体に平盤で仕上げられており、側面に稜を付けるように彫成されている。底部には体部外面と一体的となる脚が削り出されている。13は平面形が隅丸方形となる盤の底部から体部にかけての破片である。小さなボタンのような装飾性のない脚が付く。

石瓦 (25-16・17) 16は丸瓦、17は平瓦である。16は、かろうじて先端の接続面が残存するが、棟側の大半を欠失する。釘穴などは残存しない。17は正面左側隅の破片である。下面には、瓦を重ねるために平滑に削られた部分と粗削りのままの部分が認められる。

砥石 (25-18) 欠損し、約半分を失う。広い2面に使用した痕跡が認められる。

不明製品 (25-14・15) 14は扁平で大きな円形の製品である。全面にわたり平盤で平滑に仕上げられる。内面に3つの丸鑿痕があるが、装飾的なものではないようである。口縁部が印籠蓋のように削り出されていることから、笏谷石製の削り抜き井戸の蓋であった可能性が考えられる。また、大甕などの蓋として、同様な大きさの扁平な円形の製品が使用される例もあるが、それらの口縁には段が付けられないものが多い。この破片から復元される口径は61.5cmである。

15は、石製軒丸瓦から切断した瓦当部分を再利用したものとみられる。一部に滑らかに磨かれた部分があり、刃物によるものかと思われる痕があることから、砥石として使用したのかもしれない。

第6表 石製品観察表

図版番号	種別	出土地点		計測値 (cm)				石材	備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
		グリッド	遺構・層位	A	B	C	D				
			幅	高	奥行						
24-1	行火	D-5	104	(15.1)	3.9	15.6		凝灰岩	楕円型	17c後葉	S992050
24-2	行火(蓋)	D-5	攪乱	(9.45)	3.5	16.2		凝灰岩	楕円型	-	S992062
24-3	行火(蓋)	D-5	上層	(16.1)	3.7	15.3		凝灰岩	内面スス付着 楕円型	17c後葉～18c後葉	S992044
24-4	行火	E-4, D-5・6	上層	(21.0)	(11.5)	(17.5)		凝灰岩	窓部分の下 底部 スス付着 楕円型	17c後葉～18c後葉	S992046・ 53・60
24-5	行火	E-4	上層(砂利敷)	(11.6)	(6.5)	(2.5)		凝灰岩	窓部分のみ 楕円型	17c中葉	S992031
			径	全高	縁高						
24-6	粉挽臼	D-5	117	31.5	10.3	2.65		凝灰岩	上臼	17c後葉	S992074
24-7	粉挽臼	D-5	117	28.2	10.3			砂岩	下臼	17c後葉	S992073
24-8	粉挽臼	D-5	焼土層	(29.3)	10.8			砂岩	下臼	17c前～中葉	S992072
			幅	奥行	高						
25-9	風炉	D-5	焼土層	(8.25)	(12.1)	(10.8)		凝灰岩	スス付着 口縁部 小片	17c前～中葉	S992058
25-10	盤	D-6	焼土層	(22.6)	(11.5)	(9.2)		凝灰岩	体部片	17c前～中葉	S992042
25-11	盤		包含層	(14.3)	(14.9)	(8.8)		凝灰岩	体部片	-	S992069
25-13	盤	E-4	上層(砂利敷)	(10.0)	(9.0)	(11.3)		凝灰岩	脚付 スス付着 円形	17c中葉	S992032
25-12	盤	D-6	上層	(8.65)	13.9	8.05		凝灰岩	脚付 間仕切り付		S992071
25-14	不明	D-5	104	(14.4)	(5.4)			凝灰岩	甕もしくは井戸などの蓋	17c後葉	S992051
25-15	不明		包含層	13.2	12.8	3.5		凝灰岩	軒丸瓦転用	-	S992027
			長	幅	高	厚					
25-16	丸瓦	D-5	焼土層	(29.5)	13.8	(10.7)	(6.1)	凝灰岩	先端付近	17c前～中葉	S992070
25-17	平瓦	D-5	焼土層	(27.7)	(15.2)	(6.3)	3.0	凝灰岩	先端・隅部分	17c前～中葉	S992071
			縦	横	高						
25-18	砥石		包含層	(10.4)	5.6	3.2		粘板岩		-	S992003



第25図 石製品実測図2 (縮尺1/3:18, 1/6:9~15, 1/8:16・17)

第5章 まとめ

ここではまず、FKJ99-2調査区の遺構群の年代の変遷を、ⅠからⅥ期に分けて見ていくことにする。

Ⅰ期(第9図-6面) 調査区北部に落ち込みがある段階で、これは自然地形とも人工的に掘削されたものとも考えられる。福井城築城当初の状況である。

Ⅱ期(第9図-5面) 落ち込みを埋めるように土を入れ、造成が行われる。最も深い部分には、笏谷石の大型礫を入れ、そこに木くずを含む土などで埋め立てをおこなっている。ただし、土は水平ではなく、北に向かってゆるやかに低くなるように盛られている。そこに土坑や集石が作られているが、遺構が確認できるのは地形的に高い南半部だけである。これらの遺構は17世紀前葉のものであるが、落ち込みの埋め立てが行われたのが築城当初なのか、それとも2、30年あまり後のことなのかは確定できない。この点は、調査区の北にある石垣がいつ築造されたかということに関わってくる。石垣が築城当初に造られたとすると、落ち込みの埋め立てもそれと同時に考えられるが、当初は石垣が築かれなかったと想定すると、この落ち込みは堀の南肩にあたり、後に堀の幅を狭める形で石垣が築造された際に、埋め立てられたものと考えられる。

Ⅲ期(第8図-4面) 土坑と集石が確認されているが、性格不明である。

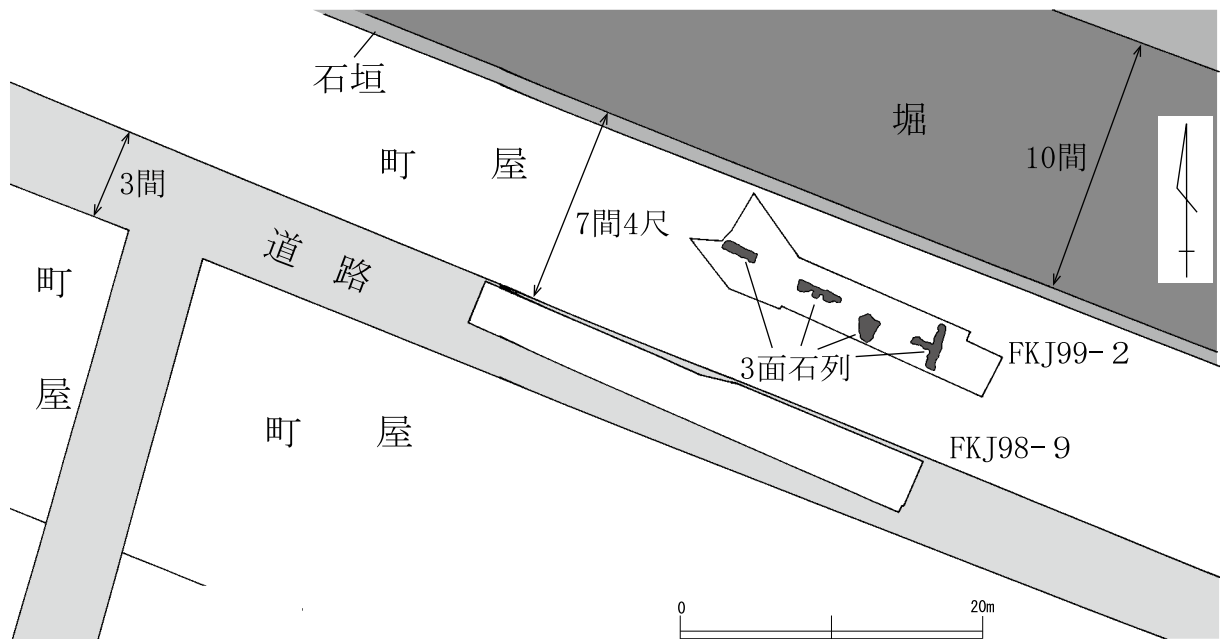
Ⅳ期(第8図-3面) 調査区全体にわたって、多くの石列・集石が作られている。寛文大火前の17世紀中葉のものと考えられる。第27図の土層模式図にあるように、石列113・114は中層1の土留めと建物基礎を兼ねており、この北で盛土面が一段低くなっている。ここに建物の北端ラインがそろうとすると、建物の南端ラインをFKJ98-9調査区の北縁近くに想定した場合、建物の南北長が7～8mほどで、奥行き4間の建物があったと考えられる(第26図)。石列115は調査区の北端まで伸びており、建物基礎と考えられる。その他の遺構の性格は不明である。

Ⅴ期(第7図-2面) 寛文大火に伴う焼土層上に作られ、17世紀後葉のものと考えられる。土坑と集石が確認されている。土坑57では火災を受けた陶磁器が出土し、大火後の廃棄土坑と考えられる。その他の遺構の性格は不明である。

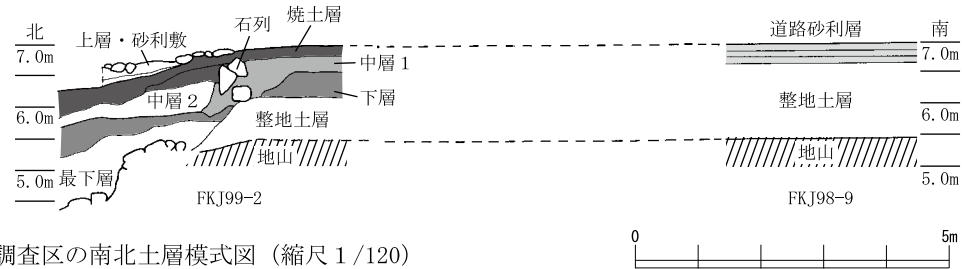
Ⅵ期(第7図-1面) 道路に直交する方向に溝や石列が走り、埋甕もみられる。石列104・105は建物基礎と考えられるが、攪乱のため、どの程度北に伸びていたのか不明である。一部に砂利敷もみられる。この面の遺構は、17世紀後葉から18世紀後葉にかけてのものと考えられる。これ以後の遺構は、後世の削平によって失われている。

FKJ98-9調査区については、福井城築城時に土を盛って道路が造成されている。その後も、二度にわたって道路のかさ上げが行われているが、その時期は特定できない。

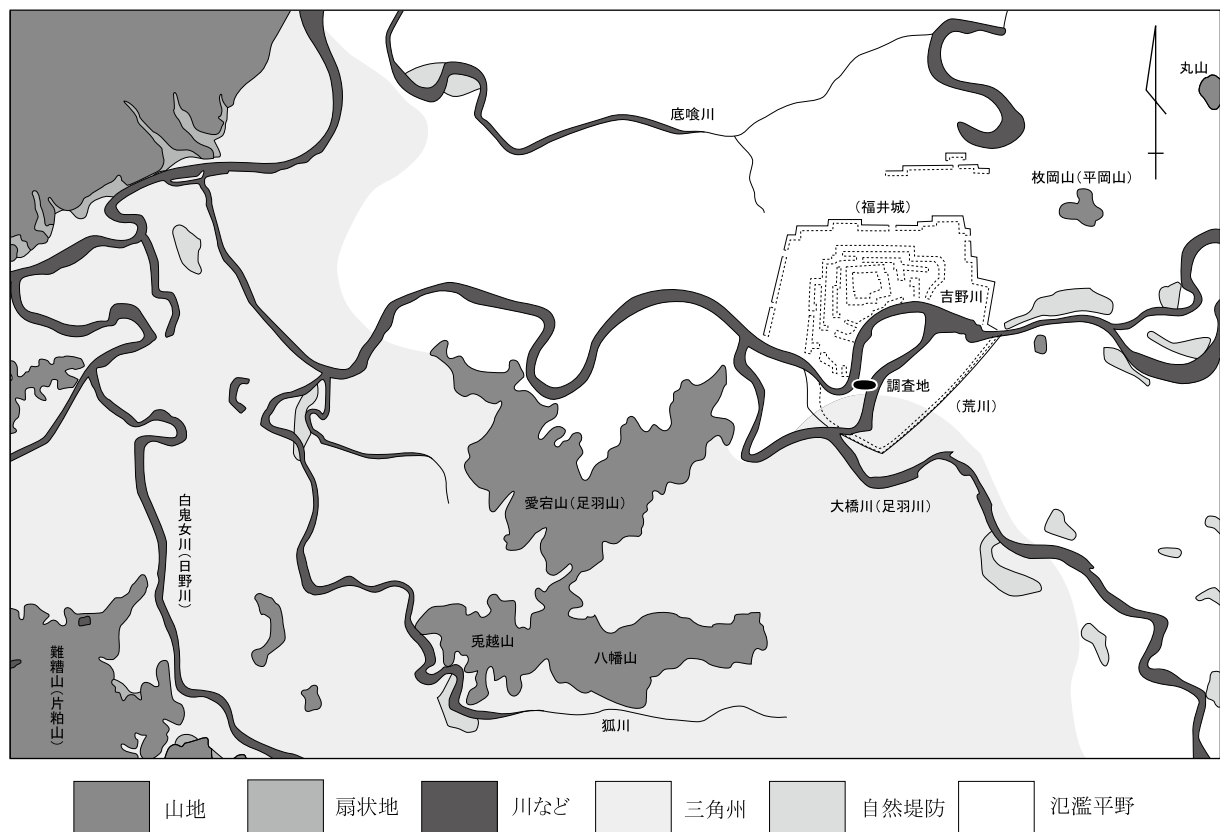
福井城跡では、近世に武士や町人などが生活した城下全域ではなく、主に堀に囲まれた城郭内を、周知の遺跡として調査対象にしている。福井城下の場合、城郭内はほとんどが武家屋敷地となっているため、これまで調査が行われた地点のほとんどが武家屋敷跡であった。その中で、この地下道地点は数少ない町屋地であり、当時の主要街路沿いの町屋の規模や構造の解明が期待された。しかし、調査範囲が狭い上に、近代の攪乱が多く、必ずしもその期待に応えるだけの情報を得ることはできなかった。ただ、福井城跡の発掘調査は今後も続き、北陸新幹線建設事業に伴い近接する町屋地の調査も考えられることから、それらの成果と照らし合わせることで、新たな事実が解明されることを期待したい。



第26図 調査区周辺の町割り図（縮尺1/500）



第27図 調査区の南北土層模式図（縮尺1/120）



第28図 福井城周辺の旧地形（縮尺1/50,000）

主に『土地条件図 福井』2004 国土地理院を参考に作成

写 真 图 版



(1) 調査区東半部道路面 (東より)



(2) 調査区東半部道路面 (西より)



(3) 道路土層断面 (西より)



(4) 調査区東端部道路造成面 (西より)



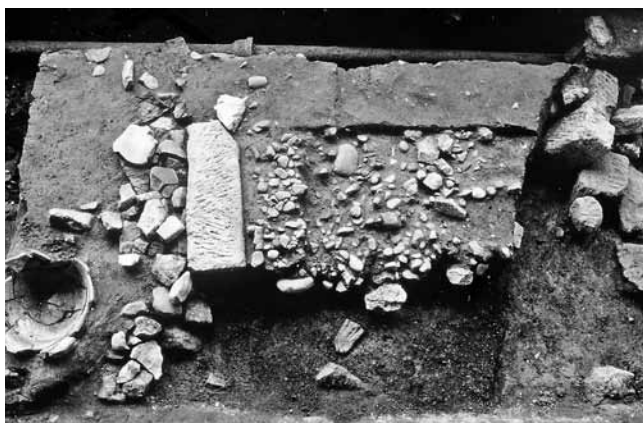
(1) 1面全景(東より)



(2) 遺構 54・101・102 (西より)



(3) 遺構 54・101 (南より)



(4) 遺構 53・104 (南より)



(5) 遺構 105・106 (南より)



(6) 遺構 114 (北より)



(7) 遺構 114 (東より)



(1) 3面全景（東より）



(2) 遺構 101・110（南西より）



(3) 遺構 115（東より）



(4) 遺構 115（南より）



(5) 遺構 113（南より）



(6) 遺構 113（西より）



(1) 遺構 74・113 (西より)



(2) 遺構 113 (北西より)



(3) 遺構 74 (西より)



(4) 遺構 74 上面土師質土器皿出土状況 (東より)



(5) 遺構 74・116 (北より)



(6) 遺構 74・116 (北より)



52-1



52-2



52-4



54-1



54-2



54-3



54-5



54-6



54-7



54-9



54-10



55-1



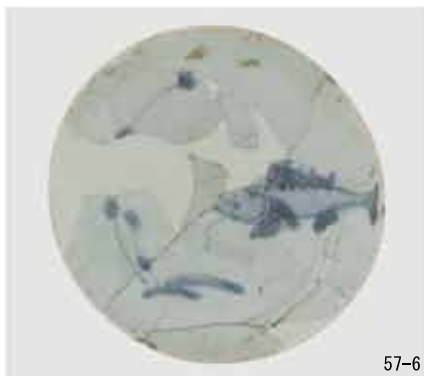
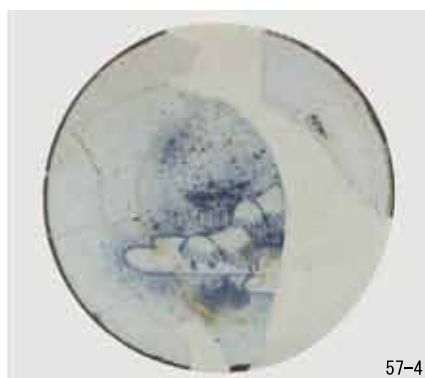
55-2



55-4



55-5





115-2



117-1



117-2



117-3



118-1



118-2



カ-1



カ-2



カ-6



カ-8



カ-10



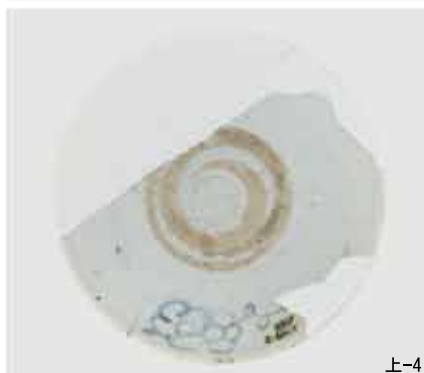
上-1



上-2



上-3



上-4





中-2



中-4



中-3



中-5



中-6



中-3



中-8



中-11



中-13



下-2



下-3



下-6



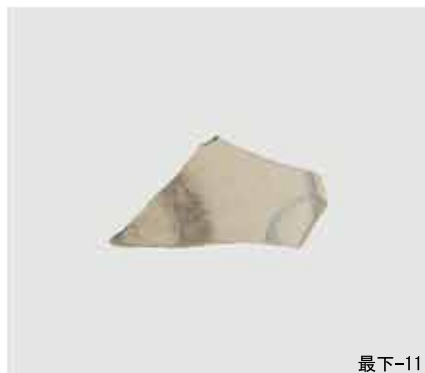
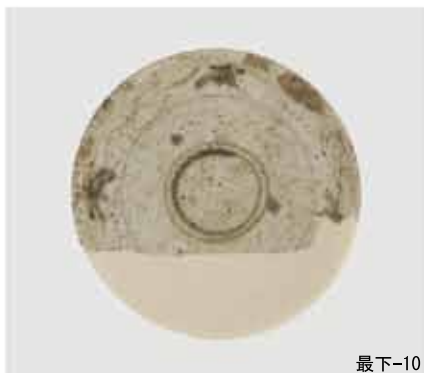
下-4



下-5



下-6







(1) 石製品



(2) 金属製品



(3) 鑄造関連遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な		ふくいじょうあと						
書 名		福井城跡						
副 書 名		ＪＲ北陸線外２線連続立体交差事業（豊島地下道延長工事）に伴う調査						
巻 次								
シリーズ名		福井県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号		第 134 集						
編 集 者 名		中原義史						
著 者 名		中原義史 御嶽貞義 木村茉莉						
編 集 機 関		福井県教育庁埋蔵文化財調査センター						
所 在 地		〒910-2152 福井県福井市安波賀町 4-10 Tel.0776-41-3644						
発行年月日		西暦 2013 年 3 月 31 日						
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
		18201	01141					
ふくいじょうあと 福井城跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 てよせ 手寄 1 丁目	18201	01141	36° 5′ 91″	136° 22′ 18″	19990104 ～ 19990122	473 m ² (表面積)	記録保存 調査
						19990715 ～ 19990808	83 m ² (表面積)	
所収遺跡名		種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
福井城跡		城郭 城下町	近世	石列・溝・土坑など		土器(土師質皿)・陶磁器・石製品(臼・行火・容器・風炉・石瓦・砥石)・金属製品(煙管・匙・碗・卸し金・襖引手金具)・鑄造関連遺物(取瓶・鉛) など		
要約	ＪＲ北陸線外２線連続立体交差事業に伴う、豊島地下道延長工事地点での調査。調査区は、福井城百間堀の南東側にある「城ノ橋下町」と呼ばれる町屋地に位置する。南側調査区は道路中央、北側調査区は道路北側の町屋地にあたる。南側調査区では道路造成面、北側調査区では建物の基礎石や土留めと考えられる石列のほか埋甕・土坑を確認した。築城に際し、北側の河川沿いの傾斜地を埋め立てて、町屋地を造成していった過程が明らかになった。この調査は、福井城跡の町屋地で初めて行われた本調査である。							

福井県埋蔵文化財調査報告 第134集

福井城跡

—JR北陸線外2線連続立体交差事業(豊島地下道延長工事)に伴う調査—

印刷 平成25年3月11日
発行 平成25年3月19日

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 西川印刷株式会社
〒910-0856 福井市勝見3丁目6-13
